

標

万人

一首洋解

全

附小傳

歌人心傳 諸式



小野小町

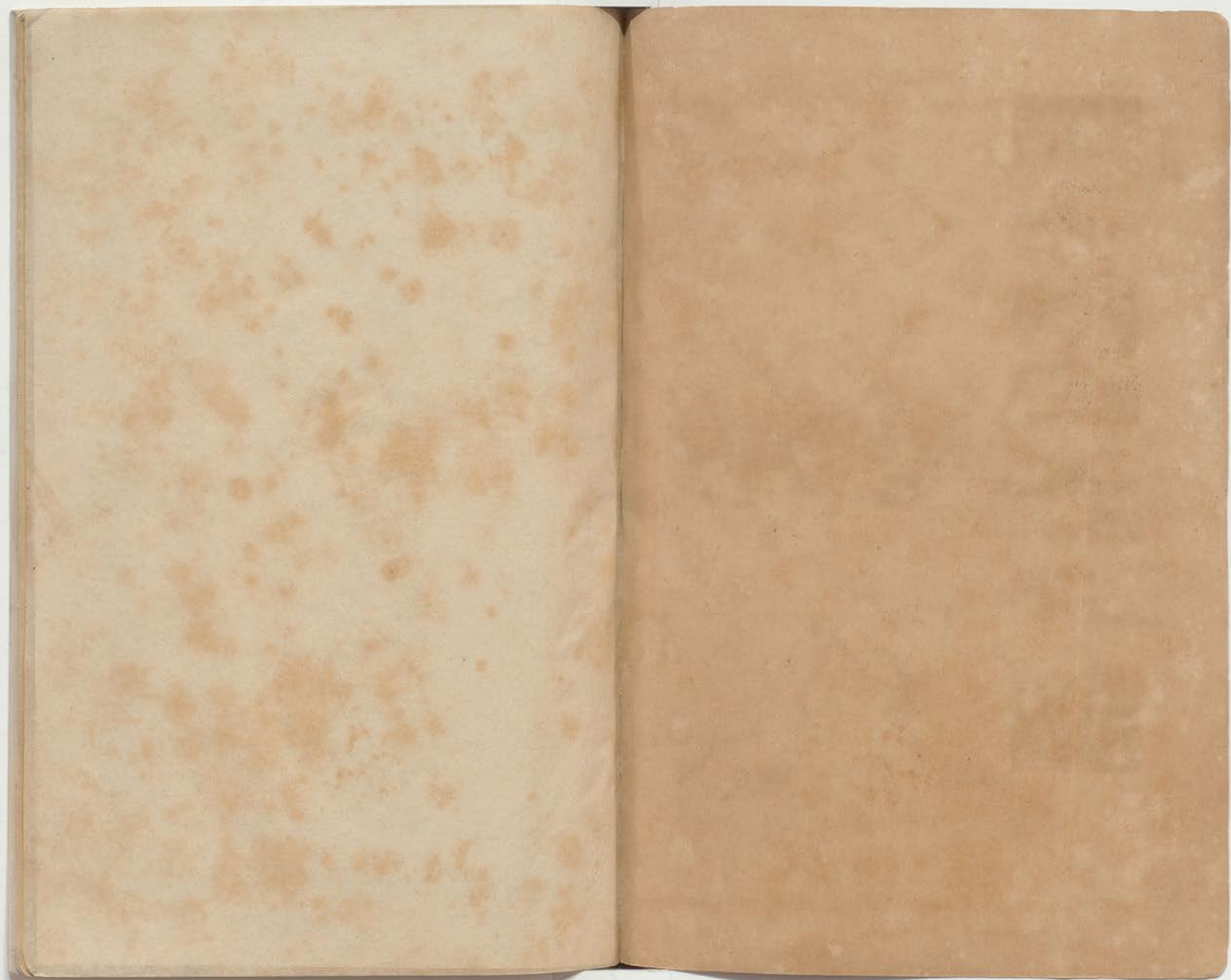
花女物語

後小町

日守

物語





三田村熊之介著

標註
百人一首詳解

附作者小傳歌人心得諸禮式

版權所有

松雲堂

百人一首詳解序

同じく三十一文字あり然ど是等の人に由り其の時に應
じて和歌乃風體各同じあらす或は其の筆翰乃高古な
る或は梅花の如たを乃あり或は其の用辭の婉麗遊美
なる或は桜花の如く牡丹乃如たを乃あり其の淡泊小し
て姿致ある或は梨花の如く其の殉綢に志て光彩あ
る或は紅楓の如く其の他色仙の如た者菊花の如た者
冬々其の香色や姿態を殊にを百人一首を蓋し群芳の
華を摘み華を振たて一園の中を植へし者あり百人各
百人の長安あり百首各百首乃妙安あり豈又園の美観

に能ずや余余又試に其の歌意を解釋を蓋し其の意を
別ち其の辨を解起其の色を采其の香を評せ其なる
世百流種之士試に此書を明窓淨几の下に綴かど百花欄
欄として眼を小乱散し紅紫芳を闢し異香室小満ち
を窺はす園小渉らずして四時の花を賞まると是らんか
是を序とふ

楓陰居士撰

凡例

一 百人一首の婦女童幼と雖も能く之を讀んじ一字を誤ることなきもさて其の意味といかに問はば能く答へ得る者はいと稀なるべし其意味をさへ知らず唯之を口の上ばすばかりにては何の詮なきことありされば此書之を心もて婦女童幼に歌の心のあらましを知らしむるまでのものにして旁々引き廣く摺りて鑑録を分析するは世間自ら其書あり此書の目的にあらず

一 古しへの今日の如く題を設けて歌を詠みしものにあらず所謂の時ふ臨み物に觸れ自然と性情より湧出せしもの多ければ如何なる時に如何なる心もて此歌を作りしかば作者の人となりを知ること肝要なり故に此書作者の小傳を上欄に附記しぬ

一 百人一首注解の書少しとせず何れも諸大家が苦心經營のあまりに成りたるものなり今此の書は是等諸大家の説を取捨折中したるまでにて已れの新説と曰ふにあらず其の疑はしきもの之を闕き兩説何れを善しとも定め難き者は兩つながら之を存しぬ一 此書注解の終りに漢文もて二三の評語を加へたるは漢詩國風体こそ變れ其乃詠する所の趣味と相等しきことを知らしめ二つには初學詩を學ぶ者の爲めに趣向を之に取らしめんとすの微意に出でしなり

一 從來我國教育の未だ開けぬ頃には家庭教育の書とていさし唯一書あり即ち百人一首なり百人一首が幾多の童幼が學びの道の楷梯となりしことは争ふべからざる事實なり其功いかで没し得べきや今之が注解をなすも此書をして益々其光を放ち家庭教育

の書に充てんが爲めなり看る人其の心し玉へかし
 一歌はことごとく假名もて書きあらそすべきなれどくつて讀み難きおそれあれば間
 ま眞字を交へ記るしつ
 一百首の中戀歌ならぬと指を折るは必かり之を少年に授くるは却て淫風に導く本から
 んと思ふ人もあるべけれどそと歌の眞心を知らぬ者の言ひ草なり解釋の爲し方意味
 の取り方よりて淫風を誨しふる媒どもなるべく性情を養ひ氣格を高尙にする材料
 とも成るべければ古人の所謂る之を義にささるることを必要なれ

編者識

百人一首の起り

藤原定家卿が後鳥羽院の院宣を受け通具有家隆雅經と共に新古今集を撰びける折不
 幸にも父の喪に丁り専ら其事に與るを得ず其の撰びざまかの心に協はざるふし多け
 れば別に古今の歌數万首の中より萃を抜き華を咀ひ之を色紙よかさせしが百人にて一
 首づゝなれば百人一首といひ小倉の山莊の障子に其の色紙を張りたれば小倉の色紙と
 もいふなりその色紙今尙は存せりこの頃の歌道ことの外盛りよして名人も多く隨ひて
 其の歌の勝負を競ひかの歌をすべての撰に與したるをこよき名譽とし漏れたるをこ
 よなき恥辱とあせり左れば定家卿この百人一首を撰ぶにも人の怨みを恐れて之を秘し
 かき作者の名さへ記さずありしを爲家卿の時にいたり始めて世に公になり終は都と
 ひなの別なくもてはやすことゝなりぬ一説に定家卿の日記を引きてこの百人一首の
 定家卿が入道頼綱の求めよりかきあつめられしものなりといふ者あり其他諸大家各
 々説あれどくだゞしければ之を略しぬ

藤原定家卿小傳

古今歌道の達人敷島の道にまたと肩を比ぶる者なき定家卿と曰ふば其の丰姿は如何に
 優美温雅なりし其の舉動は如何に都雅沈着かりしか其の品格氣骨も如何に高尙神秀
 なりしかと諸人も想ふからん其の資性躁急にして進取の念に富み常に自ら才氣を抱負
 して沈滞憂鬱不平無聊の氣を其の歌詞に吐露せし豪傑的人なりしと諸人も其の意
 外なるに驚くなるべしされど定家卿の才氣と鋒鋭とは温厚なる父俊成卿によりて大に

其の圭角を去れり卿が萬乗の僥遇を辱くし位人臣の榮を極めしことは全く其の不平幽鬱の塊を一洗し去れり雄姿風發意氣踴躍もすれば人を踢んとする駿馬は王良の御する所となり官祿の捧に飽き終に馴良駿逸の良馬となりしなり文治元年卿の殿上に於て源雅行と忿争して燭を以て其頬を撃ちし月卿雲客の舉動と之信せられざるあり蓋し卿が當時如何に才氣を抱負せしか如何に血氣勇壯なりしか其怒髮冠を衝き面色朱を注ぎ殿中を睥睨せし状態々として翹るが如し左れ必卿は自己の利刃を以て我身を傷けたる抑壓せざるざる才氣と血氣とは遂に卿をして官籍を除かるゝの不幸に陥らしめたり温厚ある父俊成卿はいるに之を憂へ悲しみしぞ眞摯なる訓誡は慈愛なる涙に和して定家卿の腦に注ぎしからん此の涙此の過ち大に定家卿の血氣を抑へたり俊成卿が心をこめし三十一文字之後白河法皇の叔聞に達し定家卿は特旨を以て本の位に復せられたり蓋し卿は此時正五位たりしなり是より後左近衛少將となり因幡安藝權介を兼ね累進して治部卿となり民部卿となり參議となり權中納言となり位は正二位となり帶劍を許さるゝに至れり卿が得意以て知るべきなり

卿の天子の知遇に感ぜり壯年の頃にありし沈滞不平の心は消へて達方もなし年と境遇と共に卿は圓滿篤實なる君子となれり卿の心には唯一片報效の赤心あるのみ左れば新古今集を始め新勅撰和歌集古今和歌集後撰集三代集伊勢物語土佐日記大和日記等或之を編輯し或は之を増訂し又詠歌大概を書き後世の模本を定め假名遣を一定したるなり當代を益し後世を利せしこと實に大なり俊成卿も亦苦むす墓の下にいと眠りの安

かりしならん

左れ定家卿は決して一歌人に非りしなり歌道の外に史傳を涉獵し詩を賦し文を作り兼ねて弓馬の道に長けたり卿は實に希代の才子なり希代の文學者なり此の才子が歌道に於ける天才の才に由るといへ實に精勵刻苦の餘に出でたるなり史又稱す卿が家に在りて歌を作るに必ず南面を洞開し遠きを望むべくし整襟危坐して曰く平常靜肅の處に於て之を習ふとき至聲乃前威儀様々たる處に於ても失策狼狽することなしと亦以て卿が用心の深きを知るに足るべし

卿應保二年を以て生る始めの名は光季後季光と改め尋て定家と改め天福元年剃髮して明靜と稱し仁治二年八十の高齡と滿身は名譽とを膺して黄泉の客となりぬ世に小倉黃門或は京極黃門と曰ふは皆定家卿のことなり

天智帝は我朝中興の名君にして舒
明帝の御嫡子母之皇極帝と申し奉
る天皇幼き御時より英明利發にま
しめて東宮に居させ茲時法興寺
の職勅の時偶然中臣鎌足なる賢臣
を得玉ひ万事之と謀りて威權赫灼
として上を薨にせし逆臣蘇我入鹿
を大極殿に於て誅戮し玉ひ大に皇
威を尊揚し玉ひ御位に即き玉ひし
後は深く心を政治に留め玉ひ律令
を定め學校を興し用を節し民を恤
み万世の基礎を立て玉へり帝學を
好み巧に歌を作り又父を能くし玉
へり秋の田の御製の如きは眞に大
御心を民の疾苦に注がせ玉ふこと
の深きを知るに足る御年四十二に

秋乃田乃加里ほ乃毫乃

そまをあらみ

我衣をまつ申ふぬれつ、

秋の田に鳥や獸が稻をあらさぬやうにと設けたる番小屋
は屋根のふきやうもあらか放すの中に居る農民は露にぬ
れながらも番をして居る心根は如何にもふびんど身は
九重の中に居玉ひて民の疾苦を察し玉ひしいとも貴き御
歌なり

黄雲盈野農事方忙兼舍露濃農民辛苦之狀描出逼真
かりはの飯庵を約めたる言葉にて山田などの人里に遠き
ところに飯りに庵を結び鹿などの田をあらすを防ぎまた
稻を刈り入れなす所なり いはは庵ありうりはのい
はと重複するやうなれどかゝるためしは古歌に多し一々

して崩御ましましき

持統天皇 (三)

持統天皇は天智帝の第二女天武帝の後より諱を東野と申し第四十二代の帝あり大友皇子の亂に天武帝と共に吉野宮より東國に落ちさせ玉ひ險阻艱難を戰陣の間に嘗めさせ玉ひ又常に軍議にもあつかり玉ひしと四海太平とあり天武位に即き玉ひし後皇后とならせ玉へり帝御人とかりしとやかにしてしかも大度あり政道の大事に於て天武帝を輔佐し玉ふこと多し天武崩御の後大位を受け玉ひしが其の御代に天津皇子の乱ありしにも拘はらず四海騷擾に至らずして天智天武の治績を繼紹し玉ひしは全く帝が統治のよきしと得玉ひしに由るなり

記るさず ときは苦なり庵の屋根を聳たるものあらみは苦のふき方のあらしを云ふみは深み辛み苦み凄みなとのみにて俗語のさに同じ故にあらみはあらさと云ふことなり 衣手は袖のことなり ついに見つゝ聞つゝ等の如くながらと云ふ意味なり

持統天皇 (三)

夏まぎて夏来ふけらし白妙の
衣ほきてふあまのかと山

樂しき春もゆめのまど過ぎ去りはや夏は来たど見へる自分はずい氣付かねど天の香久山にましろかる夏の衣をはして夏の用意をするを見て知ることぞと云ふ意なり此の時には藤原の宮とて大和の高市郡に都ありし故禁裡より程近き天の香久山の邊を見渡し民家にて白き衣をとり出まはそまを御覽ありてよませ給ひしものならん此の歌の解はいろくといふ異説あれどくくしければ畧しぬ九十春光如夢過縁樹滿餘家々爲更衣之計風物變遷之速

らめ其の文藝の道に長じ玉ひしことは父の帝に似たまひしと云や

柿本人麿 (三)

持統文武の兩朝に仕へし有名な歌人なり其の官位等の詳細あることと知り難きも持統帝の御代に石見の國より都に上り天武帝の御代にまた石見に下りて死せしとかや死後には正三位を贈られしも生前に極めて卑賤なりしことならん左れど歌よむことの堪能なれば布衣にして王侯將帥と應酬交通せしことは疑なき事實なり今尚ほ石見國に人丸の神祠あり風流雅客來り訪ふ者多く歌人の崇拜一方ならず呼ひて歌聖と稱するに至る蓋し人丸の一英傑の志を當世に得ずして心を吟咏に寄せ傲然として一生を遺

真可驚。
夏來にけらしい夏が來たらしいと云ふこと 白妙は白袴とも書き純白なるを云ふ はすてふ干すといふを約めたる詞なりあの白妙に見ゆるは衣をはすのであるといふことなり 香久山は大和國十市郡あり

柿本人丸 (三)

あし引の山の尾のまどをの

あがくし夜を猶かをねん

秋の長き夜に待つ人は來らずさてもく此の長き夜をひとり寐るより仕方なきことと打ちかこちたるかり上半句と長き夜と云ふことを起す爲めに引き來りたるものにまて意味あし之を序歌の體と云ふ

秋夜沈々待人來孤燈影暗寒闌夢冷亦是與哩歌秋夜曲同一感慨

あし引は名詞の上に冠する詞にて之を枕詞と云ふ意味なし くだりは枝垂なり枝條などの長く地に垂るるさまな

遙せしものならんか詳しきことは
百人一首一夕話なきに就きて見る
べし

山邊赤人 (四)

柳本人丸と同じく其の官名位記等
を詳にする能くすされど養老神龜
の頃歌を以て朝に仕へ天子の殊遇
を受けし人なることは疑なし後世
歌人之人丸と並べ稱して歌の二聖
と曰ひ之を戸祝尊奉を生きて帝
者の師となり死しては万世の表と
なる生前官位の卑き何ぞ意とす
るに足らん

猿丸大夫 (五)

官位年代等を知りがたし聖德太子
の孫三削王の別名なりと云ふ説あ
れども是れとて確かなる考証なし
蓋し歌に於て人凡赤人に次ぐ所

の名になり

中納言家持 (六)

姓と大伴といひ大納言從二位旅
人の子なり孝謙帝乃天平十七年從
五位下に任じ寶龜十一年參議に任
ず光仁帝の天應元年從三位となり
桓武帝の延暦元年參議東宮大夫兼
陸奥按察使鎮守府將軍とかり同四
年に中納言となり同四年に薨す和
歌を善くし万葉集を撰びしは此人
なりともいふ

安倍仲麻呂 (七)

仲麻呂一生の經歷を記すべき事多
きも今茲に其の主要を摘記せんに
仲麻呂が元正天皇の靈龜二年に遣
唐留學生となりて下道の眞備と共
み唐に赴き去は實に十六歳の時よ
てありし左れき此の一少年は實に

りなが、い、い、夜はあがくしき夜と云ふきを省きたるを
り 獨りかもねんは獨りで寐ることかはんよつまらぬこ
とぞと云ふ意味なり

山邊赤人 (四)

田子の浦ふ打ち出て、

見れど白妙の

富士の言根ふ雪ふふりつ、

田子の浦こたいたへよきけしきなるに富士山に雪がまし
ろにかうりたるさままでも見ゆる故一層の勝景をますと
の意なり

仰則連岳戴雪八面玲瓏俯則白砂青松海水如藍山得水而
愈美水得山而益明彼此相映真是一幅活畫

田子の浦と駿河國庵原郡に在り風光明媚なる勝地あり
打ち出て見ればは濱邊へすつと出て見るなり白妙は前に
出づ富士の高根 高根はたのきみねの約りたるあり
つゝ此處のつゝいはふりてある即ち現在の意味なり

猿丸大夫 (五)

おと山ふ紅葉ふみわけ

おと鹿の聲たふし

秋をかふし

秋は物事なべてうなしくあはれなるにふく山ふ紅葉かき
わけてなく鹿の聲を聞くときは尙更悲しみに堪へぬとの
意味なり

霜葉委地秋風颯々遙聞呦々鹿鳴是不愁人亦斷腸

かく山之深山なり紅葉は木葉に霜に染まり地ふ落ちし
きたると云ふ ふみわけと一面もちりしきたる紅葉を脚
にて踏み分るなり 時ぞ心故らに意味なり

中納言家持 (六)

かぞゝぎの涙せう橋ふ

おと霜の白たを見れど

夜ぞふけにける

強記絶倫才氣煥發の少年なりしなり留學十七年の久しき學益を進み識益々廣く才名朝野に噴々として王維李白の如き絶世の詩人と詩酒の交りをつひたり以て仲麻呂の才氣と學識の深きを知るに足るべし然れども唐の文物制度と仲麻呂の性質を一變せり彼は日本の遺唐留學生に非ずして純然たる唐朝の人となれり聖武天皇の天平五年遣唐使多治比廣成歸朝の時眞備は之に従ひて歸朝せしも仲麻呂は彼の文物制度の美をよるこびて去るに忍びず終に彼の土に残れり是れより玄宗皇帝の知遇を受け名を朝衡と改め左補闕の官を授けられ御子儀王の友となし玉ふ尋て秘書校書の官に遷り寵貴を極め然れども晩年

是は冬夜禁中に宿直したるときは作らして禁内の階に滿ちたる霜の白く寒さの身よこたゆるを見てよほそ夜がふけたのがわかるこの意味なり
宮庭夜深漏聲沈々御階霜白寒威刺膚盡間威儀様々百官趨走之所忽爲此寂寥之境月卿雲客豈不動情
かさぎの渡せる橋これは漢土の故事にて淮南子と云へる書に七月七日夜烏鵲填河成橋以渡織女とあるより我國にても天の河をさして鵲橋と云ひ轉して禁庭の御殿へ上る階の事に用ひたるなりわく霜の霜のふりかゝりたることなり夜ぞふけにける夜はよほそふけたと云ふ意味なり

安倍仲麻呂

天の原ふりやけ見れど来日ある

三笠の山に出でし月かも

海邊より大空を見渡せばひろくとして眼にさわる者とはなく闇うたる月輪とひかりさやけく海面をてらす

に及びては懷郷の念止むこと能はず後遂に意を決して歸朝せんとす朝野之を惜しみ詩文を作りて之を饒才將に舟出せんとし明州の海邊に到る唐人饒別の宴を設けて仲麻呂を饗せ夜に入りて明月皎々として海上を照らし壯觀言ふばかりなし仲麻呂即ちあまのの歌を作りに懷郷の情を述ぶ國音通せず唐人其意を解すること能はず仍て之を漢語に譯して示せしに一半感嘆して涙を落せしとぞ仲麻呂は夫より出船したるに不幸も海上颶風に逢ひ九死出で一生を得安南に漂着し再び唐朝に歸りければ玄宗皇帝再びその官位を授け玉ひ肅宗の世にいたりて左散騎常侍安南都護に擢でられ次で光祿大夫御

まいとくもしろしあゝ此の月こそ己が幼き頃故郷にありて見し三笠山から出でし月と同一事であるが今萬里の殊域にありて之を眺むれば懷郷の情禁じがたしとの意かり明月圓々輾波而出千里一色蒼茫無際不知故郷在何邊月同而人異境不同而感亦異天涯羈旅之客常有此感而不能道破此心實千古絶調
天の原はひろくとしたる蒼天のとかり一説に青海原も作るをよしとすとふりさけ見れば之眼を放ちて望むなり春日なる春日に在るの意のすかど意味もかけて云ひしかり三笠山は奈良の都春日のはとりに在り仲麻呂幼少の頃看るに慣れたる山なり月かもこ月であることかなアとの意味なり

喜撰法師

我が庵を都のあつみ

しかぞをむ

世をうち山を人をもふなま

史中亟北海郡開國公に轉じ三千戸の食邑を受け代宗の世に年七十にして唐に卒せり初め仲麻呂歸朝の海上にて難風に逢ひ溺死したるよし唐朝に聞へれば李白の詩を作りて之を哭す詩に曰く

日本晁卿辭帝都 片帆百里繞蓬壺
明月不歸沈碧海 白雲秋色滿蒼梧

と其の唐朝に於て推重せられしこと推して知るべし

喜撰法師 (八)

其の系譜明かならず或は橘の奈良丸の子と云ひ又紀の名虎の子なりとの説あれども今其の眞偽を考へがたし紀貫之古今集の序に宇治山の僧喜撰云々あるを見れば弘仁の頃の人にて宇治に隠居し一生を

歌書せし人ならん喜撰或は喜撰或は喜果と書く何れを可とするや定め難し

小野小町 (九)

我國に於て美人を數ふれば必ず指を衣通姫か小野小町に屈す小町は絶世の美人なりしには相違なしされど其父祖つまびらかならず或は參議輩の孫なりと云ひ或は又小野眞實の女なりと種々の説あれどもいつれもたしかならず又在五中將との艶聞を傳へ或之を謡曲に作り或は之を雜劇に作りさへ俗説あれども是れ亦信を措きがたしされど和歌に於て六歌仙の中にも數へられ餘程の名人なりしことは疑を容れず其の歌調優美婉約にして意味深長實に歌聖の名に恥

我は都のたつみなる宇治山に庵りを結び浮世の塵も到らねば憂きもつらきも忘れて居るに世人は之を察せず宇治山といふ名からして世の中の事を憂く思ひて隠遁したる人は噂をさすこの意なり

洛都之巽宇治之山芙蓉蕭條紅塵不到白眼看他世上人榮辱喜憂於我何有此間禪機此間趣味俗人不了得一

都のたつみ喜撰法師が住みし宇治山と都の巽にあたるなりしからずひは鹿の住むにあらすしありしかあらはの如くなんのこともなくありのまゝ住むといふ意なり世をうち山は宇治山といふ音と世の中の憂き路といふこといをもぢたるなり

小野小町 (九)

花の色をうつりしけり

いたづらに我身とふふ

あかたせしまに

盛りを見んと思ひしまに花はいろはうつるはるあり何の

かすこともなくうかくと日を送りしうちに露零たる花顔もかろへしに似たりと花の凋落を見てかのが顔色も衰へたるを歎せしなり

花惟易落色惟易褪昨日紅顔今日白頭美人對美花歎薄命何等韵事何等恨事

うつりし移り變るなり花の色のさめうつるひたるありけりなうつりしと云ふ意いたづらにうかくと

何もせぬと云ふ意世にふる経ると降るとにのけて言ひまなりながめは長雨と眺めどもをちて言ひしかり此

の歌の妙はうつりふるながめなど花の凋落と身の老衰とを湊合せし所にあり

蟬 九 (十)

おれや木の朽とを

あへるを別れてを

知るを知らぬを逢坂の関

こゝを逢坂の關と名けし京より諸國へ行く人もまた京

ざるなり

蟬丸(十)

姓氏つまびらのならず古説に仁明天皇の時道人なり常に髪をさらす世の人翁と号し或は仙人とも云ひたりと百人一首一夕話に曰く蟬丸は宇多帝の御子式部卿敦實親王の難色なり親王が好て彈のせ玉ふ流泉啄木てふ琵琶の曲をいつとなく習ひ覺へ後に親王にいとまを請ひ隠者となりて所さだめすいはりを結びて住みしと延喜五年の頃逢阪の關のはとりに庵室を設けて之に住み愛する所の無名なる琵琶を彈き餘生を楽しみしと世に蟬丸の像を旨目となすは誤りなり

參議室(十一)

徳は小野篁の子なり其の少壯を

へ歸る人もここを行き過ぎ別れては知る人も知らぬ人も必ずこゝにて行めふよりしてあふさのの關と名をつけ玄にやあらんとの意なり

往者還者東者西者新知舊交相逢相會往來旁午車馬絡繹之狀収在三十一年中

これやこのこここれと云ふ意味なり行くも歸るも東へ行くも西へ歸るもといふことなり別れては知るも知らぬも別れては又あふと書くべきを故らに倒裝法を用ひて上にあかしなり逢阪の關は京都と近江との界にありて往來の要路なり今は關所の迹なきも往來交通の繁きは昔日より譲らず行く者歸る者知る者知らぬ者相逢ひ相別るゝさま此の歌意の如し

參議室(十二)

わめの系八十島あけて

大蛇出でぬぞ

人ふえつけと雲の釣舟

此歌は篁が罪よりて隠岐へ流され舟出するるときに歌なぞかやいまわれと罪により流人の身となり此の濱邊に來たり誰れ一人見送くる者もなく唯蟹と釣舟の渚に繋げるあるのみされば無情なる釣舟よし情あらば蟹がはてし海原の數限りなき島々かけて舟出せしことを都の人々傳へよとの意味なり

万里遷客形影相伴一乗片舟無限海波傳語無由傷心深於海

わたは原 わたは海なり海神をわたつみなと云ふにても知らるべし原はひろくとしたる所を云ふ故にわたの原とひろくせし海のことなり八十島數多き島とことなりかけて其の邊へひけて漕ぎ出でぬぞ舟出をしたぞと人に告げよ都の人に告げてくれの意蟹の釣舟罪によりて遠く配所に赴く身なれば今舟出でしさまを言付けする人とてもなし唯其邊に見ゆるものと蟹の釣舟のみなれば之に情を寄せたるなり釣舟若し情あらば我が舟出てしさまを人に傳言せよとの意なり

僧正遍昭(十三)

大學寮の諸生となりしが文武其途を異にするといふへ才智人に勝れたる輩なれば學業日に進み文名日に高しある時帝河陽館に幸し玉ひて御製の詩句閉閣唯聞朝暮鼓登樓遙望往來船を望に示し之を批評せしめられしに望曰く聖作固より佳なり若し遙望を空望に作らば更に佳からんと帝大に愕き玉ひ汝は固より此兩句を知れりやと問

ひ玉ひければ簾ついでみて答こたへふるやう
聖作せいさくの一聯いつれん臣しんいかでか之これを知り得

べきと答へ奉る帝重みかさねてのたさは
く此二句と白樂天はくらくてんの句にて原作に
は空望くうぼうとありしを汝の才を試みん
とて假かりりに遙望てうぼうと口吟くちんせしかり實
は汝なんの白樂天はくらくてんと詩情しじやう相同しきもの
なりとて大に賞美しょうびし玉ひけり此時
に白氏はくし文集ぶんしふのわづかに一部我國に
舶來はくらいせるのみにて收めて官庫くわんこにあ
りけきと重もとより之れを知るべ
き筈はずしさて其後重は東宮とうきうの學士
となり清原夏野きよはらなつゝと共に勅しつを奉じて
令しんの義解ぎげを撰せんす是れ重が著述しやくしふの後
世に残れるものなり重性じやうしやう狷介けんけいにし
て直言じきげんを好み人に諂てんひ世に媚めいぶる
を好まず其の藤原常嗣ふじはらののちうじに従したがひ唐に
赴おもむかんとするや乗船じやうせんの事よりして

あまつ風雲の通路とんろ嘆なげたせちと

乙女のたがたをむしせゝゑん

此歌は僧正遍昭へんしやうがいまだ剃髮ていはつせざりしとき殿上てんじやうにて五節
の舞姫まひめを見てよみし歌なり舞女の幼寵やうちゆうたるさまは眞まことに天
女の地に降りしかと思はるゝばかりなり姑しよしなりと其の
姿すがたをよめて見たく別わかれ難がたき心地こころするゆゑ空そらふく風かぜよこ
の天女の如ごとき美人みじんが天へかゝらぬやう雲くもの通とほひ路ぢをふき
とちてくれとの意なり
宛轉えんてん歌舞かぶ窈窕やうてう花顔はけ舞衣まゐ隔へ離り容姿ようさ綽約しやくやく眞まこと是天女てんじよ降臨かうりん佳會けゐ難
再また願住がんじゆ斯天女このてんじよ姑しよ在あ人間にやうかん
あまつ風 天を吹く風なりつゝと助字すけにて意味なし 雲の
通とほひ路 舞姫が歸り路といふことなり天女に譬たとへへし故に
雲の通路といひしなり 吹ふきとちよ雲を吹ふきよせて歸かへれ
ぬやうにしてくれとの意なり 乙女は少女のことなり即
ち舞姫を云ふ 去さばし天人てんじん能よく久ひさしく人間にやうかんに在あることを
得んすこしのさなりとの意なり

陽成院 十三

はくまの峰とて

落るみよの河

大玉おほたまたつて瀾らんをみぬる

概おほに遣唐使てんたうしの役やくを辭やめし且かつつ西遊記さいゆうき
を作つくりて大に遣唐使てんたうしの事を講かる言ことば
思おもひに觸ふる帝大に逆轉ぎやくてんし玉たまひ逆勅ぎやくしつ
の罪つみを責め死し一等を減くじて隱岐國いんぎこく
に流ながし官を削くぎて庶人しよじんとなす重少
しも之これを屈くせず配所はいしよに赴おもむく途みちにて
滿行吟まんぎやうぎんなる七十餘韵しちじゆいんの詩うたを作る句
々々々壯辭さうし氣豪きかう爽さうなり人皆ひとみな其の膽略たんりやく
と度量りきりやうに服くせり其の翌年よくねん赦ゆるされて
都みやこに還かへり再び本の位ほんのゐに復かへし陸奥守りくおのり
兼式部少輔けんしきぶしやうほとあり尋たづねて從四位じゆゐに進すす
む藏人頭ざうじんかぶとして左中辨さなかつを兼ね參議さんぎ
に任たづせられ後終に三位を授けられ
仁壽二年十月五十一歳にじゆにねんじゆがつごにて薨きせられ
れし重平生父母に事ことへて至孝しこうなり
家素けそより貧ひんしけれども富貴ふきを求め
ず親戚しんせき故舊こきうの急いそを聞きては我が蘇そを
分わち與よふ常に文書ぶんしよを好み和歌わかを善う

筑波山つくはなのみねより出る細き流もつゐにみよの川の如ごときふ
かき瀾らんとあると同じく初はつめた何なんとなく戀こひしと思ひしこ
いろもつゝもりつゝもりて今は深ふかくなりたりとの意味なり此
歌もとより男女の戀情こひじやうを説ときしに相違さうゐなきも人間万事にやうかんばんじ皆
此これの如ごとし小善せうぜん積つみもりて大善だいぜんとなり小惡せうあく重おもりて大惡だいあくとなる
も皆みな此これの理ことわりなりさとり方かたによりて之これ應用おうよう極めて廣ひろし
滔々たうたう溪流きりう終はつ成なり百尺ひやくしふ深淵しんえん脉々みくみく戀情こひじやう相結さうけつ而半にはん不可離ふかり淺終せんしゆう爲
深ふか微終ゐ爲顯ひら是天理てんり之數すう亦また人情にやうじん之常じやう
つくばねの峰 筑波山のみねと云ふことなりねと峰みねと重
なるやうなれど峯みねの又其の峯みねと云ふことなり みなみなの川
筑波山より出る川なり 戀こひが積つみりて 戀情こひじやうもつゝみるさ
なりては 瀾らん水の深ふかくたまをたる所即ち戀情こひじやうのふかくて

くし兼て能書に開へありて草書隸書に巧にして晋唐の風あり時人皆之を宗とす

僧正遍昭 (十二)

眞崇安世の子なり俗名を宗貞と云ふ仁明帝の承和三年に従五位下左兵衛佐となり十三年に備前介兼左近衛少將となる後遂に僧となりて遍昭と号す世に之を良僧正と曰ひ又花山の僧正とも曰ふ遍昭俗にて在りし時之姿瀟灑容儀閑麗にして其の美貌宮中に冠たりしも好色の心至りて淡く其の女に贈りし歌も皆一時の戯に出でしものにて眞に其事あるにあらずされば仁明帝の崩御ありしより頼朝世を厭ふの念を起し妻子の絆を捨て佛門に入りしと云ふ

底も知れぬといふに喩ふ

河原左大臣 (十四)

みちのくのし乃ふ

をちす里誰申ふ

みだき捨てふしわれあらふとふ

そこもどの爲めに心と亂れてこそ居れ他人の爲めに心を奪はるゝやうな薄情なる我ではないよそふもどが之を察せぬとあまり情なき事ぞと恨みたるなり

我心亂如絲是爲念卿我胸然如火是爲愛卿他人百笑千媚

不若卿一語盡察我心之無他卿亦無情哉

みちのくは陸奥なりみちのふくの約りたるなり いのふもちすり信夫郡より産するもちすりと云ふ摺り衣の事なり誰ゆゑに他人の爲めにと云ふに同じ みたれふめにいもちそりは四季の草花なごをしとるもとるに染めて模様となしたるものかり故に乱れは心の乱れしにうけ染めと初めとわけてよみたるなり我ならぬにさやうか我

ではないに之を察せぬかこの意を言外に含ませたるなり

光孝天皇 (十五)

君のたれたるの野ふ

出てわのふはむ

わの衣子小雲ふるつゝ

此歌の人に分れ玉ひける時よみたまひしものにて何かそなたに進せんとおもふゆゑに野に出て若菜つまんとせしに春まだ浅く寒さつよく若菜つむ袖に雪がふりかりたり物微なりといへども我が心をこめしかうり物ありとの意なり

出彼東郊(三) 茲摘(三) 行菜(三) 春淺(三) 風寒(三) 飛雪(三) 滿衣(三) 卿以贈(三) 君勿(三) 以三不

厭(三)

君がため、下より上をさしたる詞のみに限らずをかたど云ふ意なり漢詩の清君君去なごの如し君がためをなにかくらくんと思ひてと云ふ意なり わか菜は若菜なり若菜を人に贈くるは是れ亦献芹の意に出るからん 衣手并に

陽成院 (十三)

御諱は眞明清和天皇第一の皇子御母は贈太政大臣長良公の女皇太后宮高子なり御年十一歳にして即位し玉ふ藤原基經之を輔佐す帝御即位の後殊に馬を愛し玉ひ小野清和紀正直をさの小人を昵近し玉ふ基經大に之を愛ひ遂かに宮中に入りて二人を逐ふ帝是より幽疾に罹りたまひよからぬ御ふるまひありしかば基經終に彼の漢の霍光が昌邑王を廢せし例にならひ御位を廢して光孝天皇を迎ひ立てたり帝讓位の後之陽成院に居玉ひ御疾も少しく愈へしが後又疾再び發して疎暴なる御行も多かりしが終には陽成院より二條院に遷り玉ひ天曆三年八十一歳にて崩じ玉へり

河原左大臣源融は嵯峨帝の第八子なり正和五年皇太子と共に禁中に加冠し正四位に叙せられそれより昇進して貞觀のはしめに正二位となり同十四年左大臣とある六條の河原院に住まれし故世に之を河原の左大臣と稱す融公性質遊樂を好む鳥獸蟲魚花木等を愛し別業を宇治に構へ庭園の美を極む今の平等院即ち是れなり又嵯峨に山莊を設け遊覽の所とすし嵯峨觀と名づく今嵯峨にある阿彌陀堂即ち是れなり而して其の六條にありし河原の院と其の結構麗華龍を極め鴨河の水を引きて池となし殿榭の裝飾樹石の描置何れも美を盡し巧を極め又毎日難波の浦より新瀬二十町

つゝの解は前に出でたり

中納言行平 (十六)

たちわかれのふたの

山の峯に生る

まつぎし関がどふまのへり来む

此歌は行平卿が因幡守となり任地へ行かるゝ時に知人によみ残されたるものにして今京をたちそなたとわかれてゆく因幡の山に生へて居る松にはあらねどそなたが我をまつ待つと云ふことを聞あはしばし別れてもつゝい今のまに京へ歸りて来るであらふとの意なり

故人懐我々亦懷故人。相去千里夢相牽。情相通歸來應非遠。休言今朝離別難。

たちわかれ京都を起ち別れ行くなり いなはの山因幡といふ詞に住なばといふ意味をこめたるなり まつ松と待つと通はせたるなりまつといふのしなへといふに同じ待つといふこととさへ聞かばの意味なり いますといふに

と云ふ意なり 歸りていは歸り来るなり 歸つてくるであらふの意

在原業平朝臣 (十七)

千早ふる神代を

たかす龍田川

あらくれなゐに水くゞるぞは

龍田川に紅むなせる紅葉の落ち散りたる所を碧りさす水がくゝるさまは實にめづらしき景色にてあやしき事の多りし神代にもかゝる例はきかぬと龍田川の景をはめたる歌なり

紅葉洗錦碧流綴之灼爛眩目應接不遑眞是古今奇觀神代無三其匹。

龍田川は大和に在り紅葉の名所なり 千早振る神代といふことの枕詞なり 神代もきうす神代にもかゝるためしありとは聞かぬと云ふことなり からくれなゐは韓紅なりむかしは韓より渡來せしものをはめしゆる赤のいろよ

を讀ませ遊樂を遊りて遊を愛さ奥州盤地油の景に懷せしと其の奢靡かりしこと推知すべきなり

光孝天皇 (十五)

仁明帝の第三子なり時康親王と稱し奉る御幼き時より御性質穎悟にして好んで經史を讀み玉ふ嘉祥三年中務卿に任せられ玉ふ此年渤海の使者主文矩なる者入朝し親王を見て曰く此の人貴相あり後必ず天位に登り玉はん又藤原仲實なる者あり能く人を相す嘗て窃かに其弟宗直に告げて曰く汝心を用ひて時康親王に仕へ奉つれ此の親王の御骨格世の常にあらず必ず帝王になり玉はんとされども親王は五十三歳まで小松殿にわびしく過させたまひけり基經が陽成帝を退けま

わらせしに及び迎へられて位に即
き玉ふ英明なる君にまじせしと
なん

中納言行平 (十六)

姓之在原彈正尹四品阿保親王の子
かり承和二年藏人頭に補せられ齊
衡二年從四位に叙し因幡守に任ぜ
らる元慶五年には昇進して中納言
に任せらる性極めて學を好み和歌
を能とるのみならず又經濟の才あ
り嘗て太宰權帥となりて西國の事
務を掌り邊海警なく治績頗る多か
りしと云ふ

在原業平朝臣 (十七)

阿保親王第五の御子にて行平の弟
なり貞觀年中左近衛中將となり元
慶年中兼相模美濃權守たり世に之
を在原中將と稱するも其の在原氏
の第五子にて中將なるを以てなり
業平容姿閑麗にして和歌を能くす
然れども操行放縱にして色に荒み
國家を經綸すべき才學はあかりし
と其の隅田川の都鳥の歌は古今の
絶唱とて今尚ほ人口に膾炙す

藤原敏行朝臣 (十八)

藤原の武智麻呂の子なり在原業平
の妹と婿なりとかや三代實錄に仁
和二年六月從六位上左兵衛權佐右
近少將に轉すとあり敏行和歌を能
くするのみならず能書の聞へ頗る
高かりし村上帝嘗て小野道風を召
し古今の妙筆は何人を推すぞと問
はれしに僧空海と藤原敏行なりと
答へたり古今能書の聞へ高き道風
が此の如く推重せしを見れば敏行
が凡筆に非ること知るべきなり

きをからくれまると呼びしからん水に落ちたる紅葉の色
なり 水いゝいは水面は一様に紅葉みて埋まりあらくれ
あむなるすきまから水がくぐり出るさまを恰も赤き色や
碧りなる色にて絞りたる錦のやうに見ゆるゆゑくいと
絞りと通はせてよみしなり とは、かういふ事は神代に
も聞かずと上の句に反るなり

藤原敏行朝臣 (十八)

住の江のたしふ

とる波とるやへや

夢乃かき玉路入めとくらん

ひるは人目のしげければ思ふ人のもとへ通ふをまゐなら
ず戀々の情禁すること能はずして夜の夢にも見るそのゆ
めさへも人目をよけ憚ることぞさても人目の關はさうき
ものなしとの意なり
我欲訪住人奈何世人多耳目之察察思服戀情日切夢中邂逅
亦恐人耳目之察察思服戀情日切夢中邂逅

住の江のたしふに波 下夜と云ふことを起す意の
序詞なり住の江の岸に打寄する波といふばかりにて歌意
にはかゝりなし よるさへやこのさへやはでさへと云ふ
意味にて夜のゆめの通路でさへと書くべきを故らに詞を
前後して變化せしなり 夢のかよひ路 夢に意中の人に
逢ふ其の通ひ路なり 人めよくらん 人の見るのを避く
るなり

伊勢 (十九)

ふには瀉みじかた

あしのふしのまを

あはで此ををるしてとせや

たどひ少しのひまなりとも逢へばまた心を慰むるそをも
あるなれどすこしのなも逢えずに此世を過せと申さるゝ
はあまよりつれなき事なりとの意なり
思君不見妾腸將寸斷待君不來妾心轉惆悵會面不要永
寸時相逢則妾願足矣

伊勢 (十九)

藤原繼蔭の女あり仁和の頃宮中に奉仕す父繼蔭伊勢の守たりし故に伊勢と呼ひしものならん後に亭子院(宇多帝)の寵を受け御子桂の宮を生みしより貴びて御息所と呼べり伊勢之容貌のすぐれたるのみならず心はへもよく和歌に堪能にして其の名、貫之躬經はも劣らざりしと云ふ

元良親王 (二十)

陽成天皇第一の皇子にして和歌に巧なり大日本史に曰く親王好三和歌甚好色と其れ或は然らん元慶元年より從四位の上に叙せられ尋て從三位となり兵部卿また式部卿とならせ玉ひ天慶六年御年五十四にして薨じたまふ

なには満みしかきあしのふしのまゝ 短き間と云ふことを日はんたりの序詞なり浪花満に生ずる蘆は小さきあしなりその小さきあしの節のまといへんはんに少しのひまあり あはで逢はずしての意なり 此の世を過ぐしてよどや此の世といふは一生涯の意にあらす逢はずに日が送れるものゝと云ふ意なりてよどやはさうして居よと言はるゝのかやそれは無理じやとの意を含めり

元良親王 (二十)

わびぬまをなはた同じ難波なる

みをつとしてを逢はんぞ思ふ

忍び逢ひしことのあらはれてうきめを見たれどかうして毎日よくと心配して居ればいかなるうきめも同じ事なりうの難波なるみをつくしにあらねどみをつくして逢はんそなはち命も惜しからずさうしてありと逢ひたいとの意味あり

又、相違つ何等、宿懐、何等、戀事、わびぬれば何もせずよくと心配して居ることなり

今はた同じこうなれば何をそるも同じこといふ意なり難波なる、漂々には江の濱邊にある水の浅深をはかる標木をみつくと云ふ身を盡すことにかけてよみしなり あはんどぞ思ふ逢ひたいものぞと心にきめて居る

素性法師 (廿一)

冷たむぞい玉をばの里に長月乃

有明乃月をまぢづるのふ

素性法師 (廿一) 僧昭遍昭在俗の時の子の右近衛少監玄利なるものあり是また和歌の名人なり或る時遍昭のもとの妻此の玄利を遍昭の許へ遣はしけるに法師の子は法師がよきぞとて此の玄利をも出家せしめ名を素性と付けたり素性はより佛門に入り後に雲林院に住して權律師たり又大和國石上の良因院の住持となりたり寛平法皇の大和に行幸ありて瀧を御覧あられし時變興を此院に寄せ玉ひ素性をして案内をなさしめ又歌を作らしめ玉ひしこと素性の家集に見へたり

文屋康秀 (廿二)

六歌仙の一人之紀貫之の古今集の序は康秀の歌を評して商人のよ

孤燈影暗、更深夜靜、獨坐簾懸、佳人終不來、而明月忽照、人亦足聊、補我失望、今こひと、今はついでといふことこひは來るといふ

ききぬきたらんが如しといひて其の歌の巧なる所のよき衣裳のこく目にたてゑ其の歌の姿俗にちうくて卑しき所あるを批評したれど六歌仙の一人に數へらるゝ程なれば尋常の歌人よてはあらざりしなるべし其の祖先つゞひからならず事蹟もまた傳はらされど貞觀時代の人にして鑑殿助たりしことあるは事實なるに似たり

大江千里 (廿三)

父は清和帝の侍讀となりて博覽宏才の聞へ高かりし大江音人なり千里も父の業を繼ぎて博く文學に涉り殊に和歌に巧なり蓋し其の和歌の力は多く之を漢文漢詩より得たりと云ふ官は伊豫權守式部權大輔たりし

こと いひえばかりに俗語のさういふたかかげでといふに同じ 長月は九月の異名なり 有明の月廿日以後の月は月のあるまゝに夜が明くる故有明の月と云ふ 待ち出づるかな 待つ人の來らずして却て思の外なる月の出るを待つたことになつたわい

文屋康秀 (廿三)

吹あらに秋乃草木乃志を留まば

むべ山風をあら志をふらん

山風が吹く故に秋の草木が枝折れ葉飛びまはれ居るさまを見れば山風の勢きひしき事と察せらるれば山風をあらしと呼ぶかす尤の事であるとの意なり 草木凋傷秋景日荒涼風威之強可推知也 吹からに風が吹く故にと云ふことなり いをる しほるに作るをよしとす草木の凋萎するなり ひべの宜べなり もつともいふに同じ あらしの嵐なり字を分てば山風となる 吹あらしと察し思ふ故に山風をあらしといふ

菅家 (廿四)

菅原道真公は參議是善卿の第三子にして字は三幼名を阿古と曰ふ道真幼にして聰明穎悟儒宗の家に生長玄父祖傳來の學を受け才氣日に煥發し學識月に増進し豁然として頭角を現はせり十一歳の時父是善卿其才を試みんと欲し詩を作らしめ玉ひしに道真は直に左の詩を作られたり

月輝如晴雪 梅花似照星 可憐金鎖轉 庭上玉房馨

道真後に當時の碩學都、良香に從ひて學ぶ或る時良香の家にて就射の會ありしが人々皆謂へらく道真は儒家の子にして常に戸を閉ぢ一室に閑坐し書を繙き文を草するを事とすいかで弓矢の道を知らんや

こもつともなりといひしかり

大江千里 (廿三)

月見れば千ちにをの志を悲しけれ

吾身一つの秋にはあらねど

秋の悲しきと万人みな同じことにてきて吾身一人には限りらぬに今月に對するときは心にささぐの悲しみ起りて自分ばかりひとり悲しきやうに思はるゝとの意なり 明月皎々清哀雁掠月飛非一人秋何人不傷心 月見れば月を見るゝつては 千ちにいろく 物こそ悲しけれ目に觸るゝものそれとも悲しう思はるゝ吾身一つの秋にはあらねど自分のみ秋が悲しきといふはづはない万人皆同じ情なれどそうは思へぬ

菅家 (廿四)

此度はぬぎををりあへず向山

紅葉のに志を神のまに

必ず弓矢の本末をも辨せざるべし
 之を輕蔑し居たりしが衆と共に
 矢を放つに及びて其姿勢態度儼然
 として百發百中しければ其香を初
 め一坐皆舌を捲て驚嘆したりとぞ
 さて清和天皇の貞觀元年に十五歳
 となり元服をなし今四年も文章生
 に擧げられ下野權掾となる其後學
 識は年と共に長じ寛平四年四十八
 歳の時宇多帝の勅を奉じ類聚國史
 二百卷を撰せらる是れ實に公が一
 世の大著述なり翌年遣唐使を定め
 らるゝに道真を大使とせらるゝ筈
 なりしが此頃唐朝も大亂の折なり
 し故其事遂に止みぬ同年十二月渤海國の使者悲文籍なる者來朝し道真の詩を見て白樂天の風骨ありとて大に稱美せり道真詩を作ること

少しも思ふが如く唯別殘鶯與落花
 章を成す管て延喜帝の令旨により
 二時の間に二十首の詩を作れり彼の有名なる

送春不用動舟車 唯別殘鶯與落花
 若使韶光知我意 今宵旅宿在詩家
 この詩も此時の作なりと云ふ然れども道真公の本領は決して詩文の末技に非るなり其の大まね繪の才を揮ひ其の本色を顯せしと權大納言に任ぜられし後に在り是れ實に道真公が五十三歳の時にして寛平九年の事なりし公は權大納言を以て右大將を兼ね藤原時平は大納言にて左大將たり其年七月宇多帝は位を太子兼仁親王に譲り玉ふ是れ即ち醍醐帝なり昌泰二年に至り時平は左大臣となり公は右大臣とな

此歌は道真卿宇多帝が奈良へみゆきの御供しけるなり手
 向山にてよみ玉ひし歌にて此度の内にわかのことにて神に
 さゝぐる帛の用意も致さうししが來て見れば滿山の紅葉
 錦を染めたればこの錦を神の御心のまゝよぬさどみそな
 はし玉へとの意なり
 秋深樹飽霜 燦爛映丹墀 不須捧幣帛 滿山皆錦繡
 此度はいつもどちがひ此の度まゐりしとぬさは神に捧
 ぐる幣なり どりあへずとるものもとりあへずなとの意
 にてぬさの用意もするいとまなく 手向山奈良春日の森
 の傍にありぬさを手向けると云ふことにかけて用ひしな
 り 紅葉のにしきもみちの色が錦の如く見ゆるなり 神
 のまに ぐ 神さまのかばまめししだいこの紅葉をぬさと
 見そなはし玉への意なり

三條右大臣 (廿〇)

名にしおはば逢阪山のを祓かづら
 人に知られどくもをしをがふ

名と實とたがはぬものならばかの逢阪山のさねかつらな
 らねど之をたぐるときは何處よりとも知れず皆我が手許
 に寄りくるごとく人知れずして相逢ふ道もありろふな
 のじやとの意なり

萬葉集綿率則應手而來如何我情人招之不來相逢無道恨絶
 又因絶

名にしおはば逢阪山のを祓かづら 逢阪山意中の人に
 逢ふと云ふことにうけてよみしなり さねかつら 五味
 子といふ實のなる草よて萬の一種なり逢阪山に多く生ず
 万葉集に寝ることをさねなとあるより逢ひて寝るといふ
 意より逢阪山のさねかつらとかけてよみしなり 人に知
 られで人には知られずして くるよしもかな くるは來
 るかり手繰ると通はせしなりよしもがなは仕方もありろ
 ふなものじやといふ意あり

貞信公 (廿六)

小倉山み祓のをみぢばふ、祓あらば

り並に帝を輔佐して万機を執り玉ふ時平は時に年二十七歳血氣方に壯にして動もすれを温厚老成なる道眞公と意見の合ふことも多かりとされど時平は大臣の家柄にて其妹は醍醐帝の后となり威權並ぶものなし道眞公も儒家より出て右大臣に任せらるゝことは其例なきことにて百官の批評も如何あらんと思ひ表を奉りて右大臣を辞したまひければ終にゆるし玉はざりしかば是より後は一意に報効を期し知遇に報ひんと心を決し玉ひし而るに時平は道眞公の德望日に盛にして帝の寵遇日に渥きを心嫉しく思ひ終に源順等と謀り道眞廢立を計るに及ぶに至りたり醍醐帝の固より聰明なる先王にせしめし

て當に道眞公の諫めも能く用ひたまひしは是の事なれど御年十七歳にていまだわかくおわしますに御後は時平の妹なるによりて内外より議せられければ深く其の實否を尋ね玉はずして昌泰三年正月廿五日道眞公の官職を停めて大宰權帥に左遷せらるゝよし宣旨の下りしころ是非なれば是より先き文章博士三善の清行は窃かゝ道眞公に書を寄せて右大臣の顯職を退身きを全くし玉ふべきよしを諫めしことありしが道眞公と一旦國の爲めに許るせし身なれば我身は惜しからじとて此の諫を用ひられざりしが果して遷謫の災に罹り玉へり公が兼ねて覺悟なりしとは云へ千歳を經し今日にも尚ほ口惜しきこゝ

今一ふびの御幸またおむ

此歌は 法皇大堰河へみゆきありけるとき小倉山のもみちのけしき御覽ありて延喜の帝も行幸あるべき所ぞと仰せられければ事のよしを帝に奏せんとてよみ玉ひし歌かり小倉山のもみちばも心かくばいざしらすもし心あらば帝の御覽にあづかるまではちりもせで御幸をまち居るならんとの意なり

大堰之河小倉之山満山錦繡一面秋色紅葉若有情應待戀興過

小倉山は洛西嵯峨にあり紅葉の名所なりこゝろあらはな落花若有情など如く有情の者ならばといふ意今一たびの法皇は今日御幸ありしが尚ほ今上のみゆきもといふ意またかん待ち居て散らずにあれとの意なりとの説あれど待て居るであらふとの意に解する方よろしからん

中納言兼輔 (廿七)

みかの京わけておがろゝ、名川

みつねをてか戀しかるらん

逢ひて後別るれば戀しきも道理なれど一度も見たことなき人が戀しきとは我ながら合点の行かぬことなりとの意あり
天不假三奇縁玉顔無由見不相見而相思切我不能解我心みかの原山城ありわきてなかるゝわきてはとりわきはやくと解する説もあれどやはり地中より湧き出ると見る方かだやかならん泉川山城に在り以上の句は下の句のいづみを起すための序にて意味なしといつみきとてかいつの頃に見えめた事があるによつてかど云ふ意戀しゐらん戀しいのであるか知らんとの意なり

源宗于朝臣 (廿八)

山里をそそびしそまをまけける

人國をそそるれぬぞ思へむ

山里は常よりして淋しきものなれど春の花秋のもみちなを折々には訪ひ來る人もあれど冬になりては草木も枯れ

ちこそすれかくて道真公は左遷の
宣旨下りければ宇多法皇にさげ
られし歌に

なるれゆくわか身もくつどかり
ぬども君しがらみとなりてとい
めよ

どありければ法皇之を見て涙に咽
び玉ひ直に駕を命じて禁裏に赴き
たまひ之を止めんとなし玉ひしも
藤原菅根拒みて之を通せざりし故
ひなしく還御なりたりと道真公は
今や都を出立なし玉ふ時に平素愛
せし所の梅を見て

こちふかばにはひをこせよ梅の
花あるじなしとて春なわすれど

とよみ玉ひ二月一日を以て都を發
しはとなく筑紫の大宰府に着き玉
へり是より後、當に一堂に置けし
を觀て

去年今夜侍清涼 秋思詩篇獨斷腸
恩賜御衣尙在此 捧持毎日拜餘光
の詩を賦し玉ふ忠愛の情、詞に溢
れ人をして一涌涙に咽ばしむ其他
詩歌は人口に膾炙するもの多し今
一々之を載せず延喜三年に至り公
年五十九にして配所に薨じ玉ふ一
條帝の時左大臣正一位を贈られ尋
ねて太政大臣を贈らる今の筑前の
太宰府京都の北野天滿宮何れも公
の神靈を祀る所にして社殿壯嚴に
して四時の祭祀意らず其他山村僻
陋にも公の神靈を祀らざるなま亦
以て公が遺徳の深く四民景仰の厚

訪ひ來る人とはなければとりわけ山里の冬は淋しきも
のなりとの意

樹葉盡凋落山家日寂寥前路人跡絶滿目唯枯草。

山里山に近き人里なり 冬ぞ冬はとりわけといふ意
さうける常よりも一層淋しきこと 人目山里のけしきな
どを見にくる人 かれぬ草の枯るゝこと人目の少くな
りしことゝに通はせたるなり 思へば人もたづねえず草
も枯れつてたと思へばなほさら冬の淋しさを感ずると上
の句へかへしてよみたるなり

凡河内躬恒 (廿九)

心あてふ折らむや初霜の

おたまたませざる白菊のなま

白菊に初霜のかゝりたるさまは一しほのけしきにいていづ
れ花ぞと感ふはなにわがあてずなりやうな花を折りな
ば折れもしやうが折るに忍びぬよきながめであるとの意

菊得霜 白菊の花 霜は白菊の花 霜は白菊の花 霜は白菊の花
いゝるわてにわがこゝろのかしあてにといふ意 折らば
や折らん折つたならば折れもしやうが かきまどわせる
霜が白菊の花につもりし故とれが花かどまようはとな

壬生忠峯 (三十)

あまあけ乃つれなく

見にし別れを

嘆むかりやたをのななし

月は夜の明るも知らでなほ光を放ち居るに我が情人はわ
れにつれなくもてなし夜が明けしゆゑとて我を歸しけれ
ば悲しきを思ひをしなむらも別れしことのありしより世
の中に曉はよいやなものはなと思ふ心が起きたとの意
残月尙在天休言夜既曉佳人何無情留我不少時我不怨佳
人怨東方之早白

きを知るに足るべし

三條右大臣 (廿五)

名と定方勸修寺家の元祖良門の孫
内大臣高藤公の二男なり延長二年
正月大納言より右大臣に任ぜらる
其家三條の在りし故世に三條の右
大臣と稱す

貞信公 (廿六)

貞信公と藤原忠平公の事なり公
之基經公の四男にして兄時平仲平
と共に高官に在りし故時人之を三
平といへり幼より穎悟にして父の
愛せられとなる延喜帝嘗て相者を
禁中に召し太子并に左右の大臣を
相せしむ相者曰く文獻太子と容貌
美に過ぐ時平公之才智多きに過ぐ
菅丞相と才能高きに過ぐ何れも
福を全くする相にありすと能く來
る

してくれすすげなきあつかひふりをいふ。曉はかりよ
わけはど うきものはなし。この位つらなるものはないと
の意なり

坂上是則 (卅二)

朝ぼらけ有明の月を
見ざるまでに

と志野の里ふれる白雪

朝早く起きて見渡せば有明の月の光りかど見ゆる程に芳
野の里一面に白雪がふりしとの意なり
夜來蕭々聲今朝雪滿山一望白皚々疑是殘月光
朝ぼらけは万葉集に朝開きとあるより轉訛したる詞にし
て夜のわけをいふ みるまてに 見へる程も
といふ意なり 芳野の里大和にあり此歌は是則が大和へ
赴きし時の歌なり

春道列樹 (卅三)

山河小風のかけたるしがらみえ
流れをあへぬをみぢあまけり

此の山河に風があると思ふるが影が人のかけたるにはあ
らで風がかけたるなり何故かといへば其のしがらみと見
へしは風に吹き寄せられて流れも得せぬもみぢ葉である
との意なり

秋風飄々落葉滿川相聚爲欄人工不及
山河山間の細き流れなり 風のかけたるしがらみしがら
みは欄なり岸堤などの崩れぬやうに人の設くるものなれ
ど今落葉が風の爲めに吹きよせられて恰も欄のこどく見
ゆる故風がかけたといひしなり 流れもあへぬ 流れる
ことも得せぬといふ意なり

紀友則 (卅三)

久方のひかりのせけたまの目よ

あづ心ふと花の散るらん

日の永くけしきはのどかにて人の心ものびくと落ちつ
きたる春の日に花のみはゆつくりもせずせわしさうみ散
るはさうしることじやとの意なり

中納言兼輔 (廿七)

藤原利基の子なり寛平九年昇殿せ
られ同年讃岐公に任ぜられ延喜
二年従五位の下となり延長五年従

三位中納言となり同八年右衛門督を兼ね承平三年五十七歳にて卒す加茂川の堤に家居せられし故或は堤中納言ともいへり

源宗子朝臣 (廿八)

一品式部卿是忠親王の御子なり一説に仁明帝の御子本康親王の御子なりと寛平六年從四位に叙せられ承平二年十月右京大夫正四位となり天慶三年に卒す

凡河内躬恒 (廿九)

其の父祖つまびらのならず歌を能くするを以て寛平年中甲斐少目とかり延喜帝にめされて御書所に伺候し又丹波權目淡路權藤を歴て和泉大掾にいたり六位を授けられたり古今集勅撰の時に貴之忠岑なりとい同列にて撰者に定められたり

名原頼朝多し

壬生忠岑 (三十)

忠岑もまた身分賤しき人なりしも歌道に長したるを以て古今集撰者の一人となりたり忠岑初め藤原定國の隨身たり一夜定國酒に酔ひ左大臣師尹公の御館を深更に音づれしが師尹公驚き怪しみいつくへ参られたる序に立ちよられしぞとて興ざめ顔に見ゆければ忠岑松明を持ちながら階下に跪き

鶴の渡せる橋の霜のうへを夜半にふみわけこそさらにこそ

と即座によみて彼家持の歌を本にして此の霜夜に夜中ともいはす参りしは外へまわりしついでにはあらすわき〱御館へ参られし意を主人又代りて述べければ師尹公

春色晴蕩風日晴美人心亦自舒如何庭前灼々花勿忙辞枝去以婉約之辭寄惜花之情興趣殊深誦吟數遍幽吻生香久方之光りと云ふことの枕詞にて萬古變せずと云ふ意味ありのどけき俗に長閑とかきとことなくゆつたりしたることしづ心なくは靜かある心もなくせわしきことなり花の散るらん花が散るのであるやらんと疑の心を帯びしかり

藤原興風 (卅四)

誰をのこ知る人ふせん高砂の

松をむかしの友ならふくに

昔しなじみの友は皆死したいわれひとり永らへ居ることゆゑ知人として一人もなし高砂の松は古き木にて今なほ存しかれど非情の者なれば詮方もなしと舊友を慕ひし歌なり

昔日詩酒友皆爲黃泉客唯我保殘喘知已無一人何由慰此情眞松獨千古

高砂の松播磨の國高砂にある松なり古木多し友ならふいに昔しがたりをする友でないからさて〱誰を知る人に去てよきやらと云ふ意あり

紀貫之 (卅五)

人お心さ大い流をしらむふる里を

花ぞむかしの香にふほむけり

此歌は貫之都より長谷の觀音詣つる時つねに宿りける家に久しく宿らでありしを程經て其家を尋ねし時其家の主人貫之が久しく宿らざりし事を恨むことばありければ其家の庭に咲きかりし梅の花をとりてよまれたるものなりと人の心は變つて居るか變つて居らぬかは知らねど此の梅のみは相變らずむかしと同じ香を放ち居ることぞといふ意なり

梅花不改舊時樣芬々清香迎我笑如何主人心冷熱相變速人はいざこゝろも知らず人の心はどうであるかわからぬ

も大に感^{かん}じたまひ夜の明にまで酒宴をひらき定國にも忠^{ちゅう}岑^{そん}も引出物賜はりたることありしと云ふ

阪上是則 (卅一)

延喜帝朱雀帝二朝に仕へたる人にして阪上田村麻呂四代の孫好^{よし}露^ろの子なり初は御書所に伺候し後終に大内記となり記録の事を掌る從五位下に叙せられ加賀介に任ぜらる是則固より和歌を巧にし又殊に蹴鞠の技に長したりと云ふ

春道列樹 (卅二)

從五位下雅樂頭親名宿禰の一男にして文章博士正六位たり延喜二十年壹岐守に任ぜられ又出雲守に任ぜらる其の事歴詳ならず

紀友則 (卅三)

友則は紀の貫之の從弟なり其の歌

がといふ意 故郷前此の家よしばく宿りしことある故其家をさして故郷といひしなり 花ぞ花ばかりは 昔しの前に來たときと同じこの意なり

清原深養父 (卅六)

夏の夜をまど宵ふがら

あけぬるを

雲のいつこ小月やどるらん

夏の夜はさても短きことかなまだ宵の間とおもひて月をながめ居しにはや夜が明けて月が影をかくした何處へ隠くれしものやらんといふ意なり

夏夜何太短幽賞未盡而東方既白不知明月宿何處對空茫然自失

まだ宵ながら未だ宵であると思ふうちに あけぬるを夜が明けるものなるに 雲のいつこ雲のどの邊に 月やさるらん月がかくれたのであらう

文屋朝康 (卅七)

白露小風の吹る秋の聲を

つらぬれせぬ玉ぞちりけり

白露の満ちたる野は風の吹きわたるときに露の飛びちるさまは恰もひもに通してない玉が散るやうであるとの意なり

白露滿郊野蘆荻頭自低颯然風吹起玲瓏珠玉迸秋野草露之狀描出如畫

風の吹きしくは風の吹きわたるなり つらぬきどぬ貫き綴らぬと云ふことなり古は種々の寶玉を絲にてつなぎ衣服の飾りとなしたり

右近 (卅八)

忘らるゝ身をむねをえず誓てし

人の命のをまをを安んずるな

男に忘れすてられた我身の悲しみは大抵な事でなげきもそれは何とも思はぬが神かけて渝はらじと誓ひし情人が

藤原興風 (卅四)

興風は參議演成の曾孫正六位相模

の縁道成の子なり正六位上治部少丞となりて院の藤太と号す其の事歴詳かならず

紀貫之 (卅五)

紀貫之は三十六歌仙中柿本人麿呂に對して左の第一を占むる和歌の名人にして延喜年中勅によりて友則躬經忠岑と共に古今和歌集二十卷を撰す其序は貫之の作にて有名ある文なり蓋し此頃までは皆漢文の体をうつしたるものにて仮名にて文を作るを貫之を初めとすといへり故に後世和文を習ふ者は皆此の古今集の序并に大堰河行幸の序土佐日記を模範とせざるはなし大堰河行幸序とは延喜帝昌泰元年九月に朱雀帝が群臣と幸ひ大堰河に行幸ありし時の歌の序なりと云ふ

參議等 (卅九)

海第生の小野の

志のはらしのふれど

あま里てなごか人のあま志

人よ知られじとつゝみしのふことと十分にすれど思ひあまうて人に知らるゝ程よも戀しきは我身ながらもがてんがでさねとの意なり

思ふ手申て色風、外、何、何、此、我、不、能、解、我、心、淺、考、生、とは、考、花、の、生、ふ、る、と、い、ふ、と、な、り、小、野、の、い、の、は、ら、小、の、字、は、深、き、意、味、な、し、唯、野、と、云、ふ、意、味、な、り、し、の、は、ら、は、籠、原、な、り、忍、ふ、れ、と、い、ふ、こ、と、を、起、す、た、め、の、序、な、り、あ、ま、り、て、か、も、ひ、あ、ま、り、て、顔、に、も、あ、ら、は、る、は、と、云、ふ、意、味、な、り、な、ど、か、何、故、に、と、い、ふ、が、如、し

平兼盛 (四十)

志のふれど色に出ふけりる戀は

物や思ふぞ人の問ふまで

さうかなして人に知れぬやうにとすれどいつとなく思が外にあらはれたものと見へ何か考へていも居るうと人に問はるゝとの意なり

百方抑、我情、平然、装、虚、心、幾、微、終、難、包、人、曰、何、所、憂、忍、ふ、れ、と、十、分、に、心、に、秘、め、て、隠、さ、ん、と、す、れ、と、色、に、出、に、け、り、心、中、の、切、あ、る、情、が、自、づ、と、顔、色、に、あ、ら、は、れ、た、と、い、ふ、こ、と、な、り、我、戀、は、向、ふ、の、人、の、心、は、い、ざ、知、ら、ず、わ、が、君、を、思、ふ、心

佐田記は貫之と土佐守となりて五ヶ年間彼の地に在りし時の日記なり文辭流麗にして記事真に逼り真に和文の軌範となすに足る貫之の子時文并に其女何れも和歌を善くす彼の世間の人々に瞻慕する爲宿梅の歌は此の女のみしなり天曆の御時清涼殿の庭なる梅の木枯れたりしかば其の代りを求めさせ玉ひしに西の京に色こく咲きたる木のありしをほりとらせ玉ひしに其の家の女あるじ其の梅の木に之を結びつけてまゐらせよとて何か書きたるものをし出しければ人々子細ある事にやと思ひ彼のゆひつけたる者を額覽に供へしよ勅なればいともかしこし露の宿はと問はいかにこたへん

とありければ何者の家と尋ね玉
ひしに貫之のむすめの住む所なり
と申しければ帝と彼梅の木をかへ
し遣はされしと云ふ是れ露宿梅の
故事なり

清原深養父 (冊六)

舍人親王の裔にして筑前介海雄の
孫豐前介房則の子なり從五位下内
匠允内藏所の難色たりし其他の事
は詳ならず

文屋朝康 (冊七)

父祖つまびらかならず或て延喜二
年に大舍人の允に任ずと云ひ或ハ
光孝天皇の仁和年間の人なりと云
ふ今其の信を考へがたし

右近 (冊八)

右近少將季繩の女なり父の官名に
よりて右近と稱ひなせしならん

大和物語に右近の七條の后皇子の
官女なりしと記るなり

參議等 (冊九)

嵯峨帝の御子大納言源弘の孫にし
て中納言源希の子なり天慶元年四
月右大臣より參議に任せられ天曆
五年正四位に叙せられ同年七十三
歳にして薨す

平兼盛 (冊十)

光孝天皇の皇子是忠親王の曾孫太
宰少貳篤行の子なり天曆四年に越
前權守となり後終に駿河守となり
正暦元年に卒す兼盛もどより和歌
を能くし又漢學にも通じ文章に巧
なり天徳年中禁裏に歌合せ有りし
時兼盛は己れの詠草を出して左の
方に衣冠正しく坐を占め居たり右
の方の相手は壬生忠見なりしが勝

は物や思ふと何か物おもひでもして居るか顔色が大層
わるいと人の問ふまで人がたづねる位にまで色に出に
けりと上の句にのへるなり

壬生忠見 (冊十一)

大玉をてふ我名は

またた立ちふけり

人知れず大玉思ふをたふし

わが戀をするといふ名のはやそでに世間へ知れわたつた
ことかお誰も人よ知られぬ事とのみ心得て思ひそめた
る事あるよといふ意なり
秘之又秘之此心唯我自知世評如風疾到處驚聞遍畢竟
人之口耳壅塞不得
こひすてふ戀をそるといふ まだき朝まだきなごの如き
はやきおとをいふ漢語の早已に同じ 人知れずこゝろ人が
知らぬと十分に安心しての意味なり 思ひそめしか思ひ
よめたことなるにこの意

清原元輔 (冊十二)

契りたふかたみふ袖をまほ里つゝ

末の松山波をさじぞえ

そなたもわれも互に涙にて袖をまほりながら末の松山を
波ぞ越さぬやうに此のちぎりを變へまじと契ざりしこと
はあつたでないか其の誓ひの言葉もまださめぬにはや之
を忘れたかつれなき人ぞかこちたるなり
憶昔交情如膠漆兩人相對涙如雨互誓千古不相渝の誓言尙
在耳一朝捨而不顧何等無情何等薄腸
契きを契りかきたることをあるではないか かたみにか
互にといふことなり 袖をしはかり涙の爲めに袖をぬ
らしながらも 末の松山波こそは末の松山は奥州の海邊
にある高き山まていかはさ波が高く打寄するとも此の山
を越ゆることなし故又人のこゝろのかはらぬことを松山
を波のこさぬといふなり
こゝの二字は上の句に反るなり末の松山波こそぬとく

負いかに待ちうちへたるに忍ぶれど色に出にけりの歌勝たるよしを聞く等しくひどりよろこびて外の勝負は聞かず拜舞して退出したりとぞ亦以て當時歌合に心をこめ勝負をあらそひしことの拙しきを知るに足るべし

壬生忠見 (四十二)

忠岑の子なり幼名を多々といひ後忠實と改め又忠見と改む家素より貧なりしが和歌に巧なるを以て延喜帝の知る所となり終に攝津大目となり六位を授かる天徳年中の歌合に彼の平の兼盛と配せられしが初恋といふ題にて「戀すてふわの名はまたさ」の歌をよみ之に上こそ歌はなるべしと心中ひそくに自負しけるに相手なる兼盛の忍ぶ

此の誓をかへぬとせでも契きつたてとないかとの意味なり

中納言敦忠 (四十三)

逢見ての後のこゝれふくらふれど

むかえを物をおもはざりけり

逢はぬさきにこたひ逢ひたい見たいといかはさ心を苦しめしか知らねどさて今逢みて後の心づるひといふものとまたうくべつみて一層逢はぬむかしの方がましであつたその意なり

不相逢一固足傷心相逢憂愁更倍昔日眞是人生不如意憂愁二字生涯纏人身。逢見ての後のこゝろ意中の人と逢ひ見ての後のこゝろもちいらふれば逢はぬさきと逢ふて後と心のくるしさをくらべてみれば昔しは逢はぬさきの方こそ物をおもはざりける逢はぬさきこそこれはどの物思ひとないと思ふたが中々今の心から見ればよほど物思ひが少くなかつたその意なり

中納言朝忠 (四十四)

あふふのたえてしなくぞ中々に

人をを身ををうらみざらまじ

なまじか相逢ふことあるゆゑ其後思ふやうに逢へぬことを恨みもするが一層すこしも逢ふことのできぬものならば人をとがめ身を恨むにも及ばぬあきらめもつきやすいかと逢ふことのまゝならぬを歎せしかり

有相逢之歡故有難逢之恨一宵之歡十年之恨不若自初無相逢也

たいてし絶てなりすこしもといふことは助字にて意味なしなゝにはあまなかにいふ意人を身をも人のつれなきことも我身のおじきなきことも恨らまざらまじ恨みぞあらまじの約りたるなり恨むことがあからふとの意なり

謙徳公 (四十五)

清原元輔 (四十二) 内藏允深養父の孫清少納言の父にして下野守顯忠の子なり清原氏歴世歌を能くす元輔に至りて歌名いよく高し天曆年中大中臣能宣等と共に和歌所の寄人となり万葉集の訓讀を施し後又勅命によりて後撰集を撰ぶ元輔天慶五年に河内權掾となり天元二年終に従五位上に叙せられ寛和二年肥後守に任ぜられ一條帝の永祚二年歳八十三にし

て卒す

中納言敦忠 (四十三)

敦忠は左大臣時平の三男なり延喜十七年二月十二歳にして昇殿し同廿一年正月殿上にて元服を加ふ敦忠和歌を善くするのみならず兼て管絃の道も達せられたり延喜廿二年に侍従となり次第に昇進して天慶五年三月從三位權中納言に任ぜられ六年三月三十八歳にして薨せらる

中納言朝忠 (四十四)

三條右大臣定方公の二男にして天曆六年參議となり應和三年に中納言となる世に之を三條中納言と云ひ又土御門中納言とも云ふ朝忠和歌に長ずるのみならず廣く和漢の書にわたるて學びの道にまゐらる

謙徳公 (四十五)

謙徳公は一條攝政伊尹公の事にして貞信公の孫九條右大臣師輔公の一男なり才智人に勝れ容貌うはしく常に驕奢を事とし父師輔の言を奉せず嘗て大臣の大變とて公卿百官を響應し玉ひけるを急に奥州檣紙を壁に貼し裝飾とせしことありしと然れども其の死に臨むや遺言して其喪儀を質疎ならしめしと云ふ伊尹尤も和歌に巧にして其の吟咏往々人を驚かす者あり故に村上帝の梨壺の五歌仙に勅して後撰集を撰せしめ玉ふふ常り伊尹を以て和歌所の別當となし玉へり伊尹藏人の少將よりして終には攝

あはれを云ふへた人は思ほへず

身の心たづらふありぬべたあ

あれ氣の毒などいふてくれる人は此の世にありと思ひあたらすされば此身は切なる心をいだきながらむだじにをせねばならぬういなと歎せしかり

佳人無情不顧我々衛尽矣我望極矣失望又落魄何無一人憐我死

あこれ哀れかりきのとくといふこと思はへず考へて見てもそんな人いあるとも思へぬいふべき人我が死を聞きて氣の毒じやといふてくれる人いたづらに人にきのとくともいふてもらへずはんのむだ死にといふことなりぬべきかなそういふことにならねばならぬかいなアといふ意

曾根好忠 (四十六)

由良のせをわたる舟人楫をええ

舟人知らぬ戀乃みよりのあ

由良のせをわたる舟人が楫をええといひわたるたよりもなく行先き如何なるか知れず戀の道にさまよひ居るの意なり

桂棹蘭漿折尽不爲用徒漂于情波之中不知身是着何處浮沈只任天

由良のせをわたる舟人をええといふことなり行衛も知らぬことなり楫を失ひたることなり行衛も知らぬことなり戀のまじかかわが戀路もそれによく似たることかなといふ意なり此の歌三句までは我が戀路に喩へたるなり

惠慶法師 (四十七)

ハ言律まげれる宿の淋しさに

人こぞ見え秋秋を来ふけり

秋草がいやがうへにはへまげりあはれてたる淋しき宿に主人の見ぬが秋はあひかはらず来て居るよとの意なり屋傾壁落草深三尺主人去無迹秋色十分闌

政となり富貴榮華を極め年五十にして薨す

曾根好忠 (四十六)

其の父祖詳からず嘗て丹後の掾たりしを以て人呼びて曾丹といへり初は丹後掾といひ後は曾丹後といひ終に曾丹と呼ひなすに至れり好忠聞きて終にはそたと呼はるゝに至らんと歎息したりと云ふ好忠嘗て圓融院の催されし船岡山の子の日の會に召しもなきに出頭して歌人の坐に就き種々問答の上終に坐より引き下ろされし事ありしよはそ歌に執心の人なりしと見ゆ

惠慶法師 (四十七)

祖先つまびらのならず花山院の寛和の頃の人よて兼盛時文重之などと云ふ諸師とは國々の國分寺に一名つゝ置きたるものなり

源重之 (四十八)

清和天皇の皇子貞元親王の孫にして從五位の上侍從源兼信の子なり養はれて兄兼忠の子となる康保四年十月始めて左近衛將監に任じ同川在近衛將監となり夫より累進して左馬相模權守となり長保年中陸奥國にて卒す平兼盛がみちのくの名取の郡黒塚といふ處に重之がいもうとあまたありと聞ていひつかとしける歌に

みちのくのあたしが原の黒塚に
見これりとも聞くはまことか
とある是は女をわざと見といひな
して重之のもとにいもうとたちの
あまた有をゆかしと思ふ心を藏に

八重葎幾重にもまげりはびこりたるむぐらのことむぐら
之秋草の名なり 淋しきまざびしき故にの意あり 人こ
そ見ね宿の主人は居らぬけれども 秋は來にけり主人
の居る居らぬを問はず秋はちやんと來て居る

源重之 (四十八)

風をいたみ岩うつまみの已乃み

とだけてをの思ふ大波のち

風がつよきゆゑに海の波が岩をうてども岩はそこしも動
かず波のみ碎くると同じこと我が思ひは切なれどもつれ
なき人とは何とも思はぬゆゑわれはあり心を碎いて居る此
頃かなと歎せしなり

風潮海波、森々觸、應々不動、而波自碎、佳人之心如巖、屹而不
動、我心如波、獨自碎、

風をいたみ、風がさびしきによりての意なり 岩うつ波、風
の爲めに波が岩にうちあたるなり 已のみ岩はすこしも
動らず波自身がいふことと、碎けて波が岩にあたりて

だけることを自分の心をいためることに喩へたるなり
頃か、このころの我が懸路のありさまなりと歎せしな
り

大中臣能宣 (四十九)

御かたを望みぬ

たふしの夜をええ

晝をたえつゝ物を大に抱へ

禁裏の御門を守護する衛士の焚く火のやうに夜はそなた
を思ふために心はもわたつばかりにて晝のまたきわゆる
ばかりに物思ひをなそひるもよるも心を痛めぬ時とてそ
なしとの意あり

夜、則情火焦、我胸晝、則消魂忘、我身、片時無忘、鄉愛、悶朝又暮、
御垣守、御所の門を守ること 衛士のたふ火古之禁門の
番卒、簀をたきて警衛す之を衛士と云ふ 夜いも毎夜い
ゝそなたのことを思ひてわが胸をこがすといふこと 晝
は消ぬつゝ消ぬ入るばかりに思ふこと 物をこそ思へた

いひ送りしなり諸曲の安達が原は
此の歌より作りたるものなり
といふ

大中臣能宣朝臣 (四十九)

神祇大副祭主頼基の子なり初め藏
人所に伺候し讃岐權様となり天徳
年中神祇少佐となり次て大佐に轉
じ安和の初め少副となり從五位を
授けられ大副に轉じて祭主となれ
り後又正四位に進み正暦二年八月
九日七十一歳にて卒す能宣和歌を
善くし古學に通ず天曆年中萬葉集
を昭渴舎て訓讀せし一人なり又
阪上望城紀時又源順清原元輔と共
に後撰集を撰す即ち梨壺の五歌仙
なり能宣少かりし時嘗て某親王の
祝宴に侍し

い物案じをのみして外の事に氣がゆるぬ

藤原義孝 (五十)

君がふた惜しおらざりし命を

おがくをかなき思ひけるのあ

逢はぬ中には此の戀ゆゑに命をすてゝも惜しからず命に
かへても逢ひたいと思ひつめて居たがさて一度逢て見れ
ば急な命が惜しくなりて行末久しく添ひ逢たたいと思ふ
やうになつたといふ意なり

昔時未逢之日自期拾二身今日相逢之後却望双棧長眞是
人情得離又望聞

君がためそなたゆゑならば
惜しくないと思ふて居たに
て見れば中々命が惜しくないどころか行末なくあれか
しと思ひけるかな思ふやうになつたわい

藤原實方朝臣 (五十二)

かくやどふえやえ

ふふたのやしをくさ

やしをあらしをゆるおをを

のやう思ふてゐることさへ得いはぬよりて我が胸がも
ゐたつばかりになつて居ることとも知るまゐなあの意な
り
戀々蟬子我胸未下阿佳人傾瀉佳人不知如此切相見如路
人

かいとだに かう思ふて居る丈なりとの意
ふきのいふきは下野國にある山名なりわやばは言はね
ばと云ふ意なり さしも草の伊吹山に生ず炙治に用ひる
草なり下のさしもを起すために引き來りたるものにて又
下のもゆると相照らす さしも知らじなさうであるとも
知るまいなわ もゆる思前のもぐさに應じて我思の切な
るを云ふ

藤原道信朝臣 (五十三)

明ぬれどくろ、物をえ知るあがら

とよみければ一坐皆其の頼才に感
服したりと蓋し盃を月と見做せし
なり

藤原義孝 (五十)

一條攝政伊尹の第三子なり容貌秀麗
麗舉止閑雅にして而も深く佛道を
愛し他の貴公子の如く狂花折柳の
念なし著て月夜に乘じ獨世尊寺に
至り梅樹の下に逍遙す神韵縹渺と
して仙の如なりしと云ふ義孝年十
二歳ある時一條帝の御前に於て連
歌の會あり秋をたゞ夕まぐれこ
ろたゞならね」との句に获の上か
せはぎの下露」といふ句を付け大
に一坐を驚かせし事なり父伊尹大
に喜び此子必ず後日歌道に長すべ
しと喜ばれしが果して其の言の如
し後痘瘡にかゝりて卒す

藤原實方朝臣 (五十二)

左大臣師尹公の孫侍從定時の子なり
叔父齊時の子なる一條帝に
仕へて侍從右兵衛權佐と爲る位
の上に叙せられ左近衛の中將に
いたる或時殿上人と共に東山に逍遙
そ驟雨沛然として至る人々倉皇狼
狽して雨を避く實方獨り從容とし
て驅かず樹下に貯立し

さくら狩雨はふりさぬ同しくい
ぬるとも花ののけに宿らん
この歌を詠み其の裝束衣冠の雨に
濕ふを顧みざりし後、人ありて之
を主上へ奏上せしに藤原行成傍に
在り之を評して曰く歌句妙なりと
雖も其の行は狂に類せりと實方
ひそかに之を聞き心に行成を恨む
後又行成と殿上に於て事を争ひし
に前の慢りを晴さんどにや物を以
て行成の冠を打落し庭上に捨てた
り此時行成少しも怒る色なく主殿
司をして冠を取らしめ自ら亂髮を

夜が明てひるとなるも又すぐには夜となる故まもなく逢へ
ることは分りきつて居ながらも夜明けの別れがつらぬと
の意なり
日出日没晝夜循環今朝相別今夜又可相逢如何今朝戀々
不忍別
明ぬればくるゝ夜が明けりやまた日が暮れるはあたりま
へといふ意 知りながらよく承知して居ながらも なほ
うらめしきそれにどうも今朝の別れがうらめしむといふ
こと

右大將道綱母 (五十三)

嘆たつゝ飛せり

寐るもの明くするを

しかふ久き夜をのぞかぬ知る

が主の眠りの過ぎをさちわびてひどり寐る夜ももう夜が
明けぬりと待つ間の長きことはどのやうふあらふか察し
下されとの意なり
寒窓孤枕待郎々不來轉反側恨三秋夜長耶若察此情勿咎
開扉遲
歎きつゝ今宵も主はかどづれ玉はぬかどかこちながら
ひどり寐る夜の明る間はひどり寐てみても寐られず夜の
明るを待つ間は いかに久しきどのやうに長いことい
かどしる思召しなさるか僅かに門を開くるに手間取りた
りどてさな咎め玉ひぞとの意なり此歌は或人が尋ね來り
門の戸をあくるひまどなりたりと不足いひしゆゑによみ
たる歌なり

儀同三司母 (五十四)

わすれじの約束までもかたけれぞ

けふを限りの心のちをのぞ

人の心はかはり易きものゆゑいつくまでも添ひとける

理し徐に其の理由を問ひければ實方一言の詞なくして退けり一條帝鏡内より此の有様を御覽ありて行成を賞し進めて藏人となし實方の中將の官を奪ひ歌枕見て參れとて奥州へ遣はされたり後終に奥州にて終る今に其の墳墓ありと云ふ

藤原道信朝臣 (五十二)

九條右大臣師輔公の孫法住寺爲光の子なり官位左中將從四位に至り正暦五年卅三歳にて卒す和歌の名當世に高かりし

右大將道綱の母 (五十三)

藤原の倫寧の女として攝政兼家の妻となり道綱を生む日本三美人の一人なり著す所の嵯峨日記世に傳ふる

藤原三司の母 (五十四)

藤原三司伊周公の母なり從三位階眞人の女にして中關白道隆の室となり伊周并中宮定子を生む天性文事に長じ其の作佳々男子を凌駕するものありしと云ふ儀同三司とて儀、三司に同じと云ふことにて三公に准する格式なり

大納言公任 (五十五)

小野宮太政大臣實賴公の孫三條の太政大臣賴忠公の長子なり天元三年清涼殿にて元服す帝親ら冠を加へ玉ふ正四位の下より侍從となり後累進して大納言とある世に四條の大納言と呼ぶ公任人となり聰明よして和漢の學に通じ諸藝通曉せざるはなし和歌及び筆迹は特に其の長技なり或る時關白道長大堰河に舟遊をなす時歌の管絃の三

ことは所詮六かしいことなれば命はもとより惜しきものなれどけふををぎりに死にはてなば人に捨てらるゝやうなうきみに逢ふぬにも及ばぬいつそそれが望みじやこの意なり
人心易變千歳之契固不可期寧望我命今日終不忍他日爲秋扇之身
忘れじの互にわすれまじとの誓は行末までは難ければいついづれでも變らぬといふことは中々できぬものにていづれか捨てらるゝ時あればけふを限りの命もがな後になりて捨てらるゝうき目を見るよりいつ今日互の中の睦しき間に死んでしまへむうらみづらみがなくてましじやとの意なり

大納言公任 (五十五)

瀧の音をぬいて

久しとなるぬれど

名も流れて忘れぬえけれ

此歌は大覺寺にある舊瀧のあとを見てよみたるものにて嵯峨上皇の御代に瀧を落させ遊覽し玉ひし迹なりといふ歌のこゝろは嵯峨帝の御覽ありしときには定めて立派なる瀧もありしならんは今に至りて其の瀧の落つる音もせずありさまは變りてあれど其の評判のみは世間に流れてたり居るこの意なり
遷今昔之感
瀧の音はたねてひかし嵯峨帝の御覽ありしといふ瀧の水はかれはてゝ音もなし久しくなりぬれど時代もよはしたつたゆゑ唯其の迹のみなれど名こそ流れてその名ばかりは世の中に流れわたり廣まり居るおと瀧の音と上の句にありし故名こそ流れて受けしなり猶きこぬけれ音は聞へぬと名のみはまだ世の中に評判せらるゝこの意なり

和泉式部 (五十六)

あらざらん此世の外の思ひ出ふ

船を浮べ各々其の道に堪能なる人を乗す此時道長と公任より向ひ足下は何れの船を擇ぶやと問ひしに公任は和歌の船と乗り

朝まだきあらしの山のさむければもみじのにしき着ぬ人ぞなきとの名歌を詠みたり後人に語りて曰く我をして嚮に詩船に乗り此歌の如き詩を作らしめば其の名必ず揚るべきに詩船に乗りざりしは遺憾なりしと後花山院拾遺集を撰ぜられし時もみちの衣と改むべしと仰せありしも公任之を可とせずもみちの錦とある儘にて之を載せたりと云ふ公任後には僧となり北白河に山莊を設けて之に閑居し長久二年七十六歳にして死す其の著書并に家法今尚ほ世に存し人皆之を貴ぶ

和泉式部 (五十六)

越前守大江雅致の女なり和泉守橘道真の妻とありしことあるを以て夫の官名により和泉式部と曰ふ夫道真死して後上東門院に仕へ後終に藤原保昌の妻となり小式部内侍を生ひ天性和歌を好み兼ねて諸學に通じ佛法をも極む後の夫保昌に従ひて丹後へ赴きし時保昌は狩をなさんと其の準備をなしかける其夜鹿鳴甚だ悲し式部之を聞て悲哀に堪へず夫に向ひて明日の狩を止めんことを請ふ保昌曰く然らば其の變りし名歌をよむべしと式部即ち

ことわりやいゝでか鹿のかかざらん今宵ばかりの命に思へば

今たびの逢ふとしをがふ

自分此度重き病にかかりたれば所詮永くは此世に居るまじせめてはあの世へ往きてからの思ひだし草に今一度この世にて逢ひたいものじやとの意なり

死期在近黄泉途遙唯願保殘喘之中更一升顔色辭氣凄惻動人

あらざらんもはや死期に逼り居りて此世に居らぬ此の世の外死んでから後の事あの世といふ意なり思ひ出にあの世にて何の楽しみもなるべければ時々思ひ出して心を慰むる程にといふ意なり今一度せめてはも一度逢ふよしもがな逢ふことの出来るやうにと願ふなり

紫式部 (五十七)

遊里安むて見しや

されどをわかぬまふ

雲かくれにし夜半の月かま

此歌久しきうちにわかれぬがたに逢ひまに際にもなくまた別れける時によみたるものなり全句月を以て喻へ本意を其中に寓す年月たつてやうくめぐりあひ互に顔を見たか見ぬうちにまたわつるゝはいなさば明月が雲に隠れしこゝちするとの意なり

明月破雲忽漏微光幽賞未幾忽又入雲與舊友偶相逢歡晤未盡忽又匆匆別手去遺憾何極

めぐり逢ひて月の巡ること舊友にめぐり逢ひたるころをかねていふみしやそれともわかぬまに見たる見ぬかわからぬくらゐはんのわづかなうちにといふこと俗にいふ挨拶もするのせぬうちにいふに同じ雲かくれにし月が雲にいら姿をかくせしをたまさか逢ひし友にたちまち別れしに喻ふ

大貳三位 (五十八)

有馬山いふのや、まら風吹けど

いづれを人々を忘まやまを

この歌を詠じける故保昌は遂に狩
を止めたりといふ式部本名を辨の
内侍と云ふ今世に傳はる所の辨内
侍日記は其の自作なり

式部 (五十七)

我國古今閑秀の賢と説く者は必ず
式部を稱す式部の名は彼の
石山の月と共に千歳に輝けり世の
婦人にして才高く文學に長ずる者
の動もそれば人を侮り夫を輕んじ
素行修さらず婦徳欠くる所あり而
るに式部は博學高才の身を以て温
良恭謙の徳を具へ夫に事へて貞
能く其の終りを全くす賢といふべ
きなり著す所の源語五十四篇
能く人情を寫し風俗を示す其の文
辭の典麗優雅なる實に後世學者と
爭はんと欲する者なり

赤染衛門 (五十九)

やまらおでねなまじをのを

やとふけて

能ふくまの月を思ひかな

新樂したる人の聚らざりし時によみてつかわせし歌に
かやうかことい初より知りたらばくよくとせず寝る
であつたものをたしかに來るといひかこされたことをま
こと思ひて月の傾ぶく頃までも待つて居りしと注意な
り
若微今宵踏月來之約則妾夢却不驚于庭前之樹聲唯信
君約束之堅通宵不眠空見殘月傾山眞無情之人哉
やすらはでくよくとまぢわびもせずといふこと
なまじものを寐るのであつたのにさよふけてさよは小
夜なりさよふけては夜深になりたること傾ふくまでの
月を見しうな主は來らず待ちに待つて終る夜明の月が山
に入るのを見たどの意なり

小式部内侍 (六十)

大江山生野の道の遠けきぞ

またふみを見ず天の橋立

この歌に付きての物語は上の欄なる小傳に物しつれをこ

式部は實に女流の豪傑といふべき
なり今其の實傳を尋ねるに式部は
中納言兼輔の曾孫、從五位下藤原
爲時的女にして母攝津守爲信の
女なり幼にして慧敏人に過ぎ深く
學文を好み兄惟親の傍に在りて其
の學ふ所の書を悉く讀記を父爲時
常に其の男ならざるを憾とす長ず
るに及びて才學益々進み万藝極め
ざるはなし右衛門權助藤原宣孝に
嫁し二女を生む宣孝死して後は堅
く貞操を守りて再び他に嫁せず當
時宮中淫靡の風甚しかりしに式部
が此間にありて能く貞操を全くせ
し一事にても式部が尋常の婦女よ
非らざるを知るに足らん是より後
は上東門院に仕へしが當時才媛輩
出し皆才華を炫ふ式部此の間に處

し謙抑自ら處し毫も其の才藝に高ぶらざりしと云ふ而して其の有名なる源氏物語は式部が夫に別れて後四五年間の作なり世には之を好色の書といふ者あれども是れ其の外を見て其の實を知らざる者なり文章の優美なると言ふまでもなく種々様々の世間にありたる事を蒐集し人の訓戒となさんとて深く心をこめて書きたるものとして所謂人情世態を盡したるものなり神事祭禮の古法葬式の服色の濃淡飲食献酬の事歌舞管絃の事よいたるまで當時の情態を知るには此書に若くものなし實に有益なる著述と稱すべきなり然れども好色の書なりとの評は獨り後世に起りしのみならず當時にありても其評高かりしと見え道長公は式部の源氏物語を見て傍にありし梅の折枝に懸ける紙へ書かれし歌に

すきものと名にしたてれば見る人のわで過ぐるこあらしとぞ思ふ

とあり梅と味の酸き者なる故好き者と通はせ式部が源氏物語を作つてより色好みの名世間に高ければ見る人、梅を手折るが如く其體に見過す者なからんと意を含めたるなり而るに式部は人にまた折られぬものを譲ふ此のすきものとくちならしけん

との返歌をよみ我が胸中に守る所あることを言ひ露はしたりと云ふ式部は藤原爲時の女なる故に人皆

いに詳しく記るさず歌のこゝろは母のゆきておる丹波へは大江山生野などいふところありて道も遠ければいまだたよりの文もまゐらぬとの意なり大江山生野天の橋立の三つの名所を讀みこみ天の橋立のけしきを踏み見ぬ事によせて母より文の來ぬことをいひあらはしたるなど此の歌の妙所あるべし

千岳又万山距京幾十里只聞三三橋之勝未目三三橋之景假然風景辨無琅玕之贈何等婉約何等敏慧大江山之丹波にある深山なり生野これも丹波に在る名所なりふみも見ず母よりの文が來ぬこと自分が其の地を踏まぬことを通せたるなり天の橋立日本三景の一にして丹波に在り母和泉式部は此時丹波にありし故に丹波丹後の名所をよみこみて音信のききことを言ひあらはしたるなり

伊勢大輔 (六十二)

いふしへの奈良の都の八重桜
けふ九重ふにはむぬるか

奈良の都の八重桜はけふも其の奈良の都にありし八重桜とけふ時を得て九重の御殿の上にはひとはなちかるとの意にいしへの奈良の八重の八重の九重の九重の自然に五七八九と數字をよみこみたるは此歌の巧を弄する所なり故昔寧樂都今日寂寥蕭瑟空見斷礎零瓦唯有當時八重櫻年年歲々不改色今日登在九重禁闕裏亦是與平中將咏滋賀櫻同一感慨

いにしへの伊勢大輔がこの歌を作つて一條帝の時なり故に奈良の朝をさしていにしへといふ奈良の都元明帝以下七代の都なり九重天子の御殿を九重といふにはひぬるかな奈良の都はあれはたれと花のみは相變らず色香を改めず今日願上より上りてにはふありささに感慨を寄せたるなり

清少納言 (六十三)

夜をふれて雪の終らぬを
えかすを

始て藤式部と呼ばしが源氏物語に
紫の上の事を殊に巧に寫し出せ
しよりして紫式部と呼ばせりと
又式部が能く日本記を讀みしを
以て日本紀の局とも云ふ實に古今
にめづらしき賢女と謂ふべし

大貳三位 (五十八)

藤原宣孝の女母は即ち紫式部なり
辨の局とも号す太宰大貳高階成章
の妻となり後一條院の乳母となり
て三位の官を賜はりし故大貳の三
位と呼ばしなり著す所の袂衣四卷
文辭流麗にして源氏物語と共に世
に賞美せらる

赤染衛門 (五十九)

大隅守赤染時用の女なり時用、衛
門の尉たりし故に其の女を赤染衛
門と呼ばしなり年長して大江匡衡

の妻となり御堂關白道長の北の方
倫子に仕ふ尤も和歌に巧にして和
泉式部と名を等しくす或る時藤原
公任中納言を辞せんとして當時の
名儒紀齊名大江以言に托し其表文
を草せしむ皆意に適せず乃ち更ら
ふ匡衡に頼す匡衡之を讀し家に歸
り呻吟之を久しくして良案を得る
能はず衛門之を怪しみ其の故を問
ふ匡衡は其の仔細を語りて齊名以
名の如き名家の文も尚ほ意に適せ
ずとあらば我如何にして筆を下そ
べきや故に心を勞するなりと曰ひ
ければ衛門は少く沈思して曰く公
任卿は其の祖先の高位高官なりし
に似ず近年官位昇進せず頗る沈滞
不平の意なり其の意を骨髓として
書き下さば可ならんと匡衡も之を

世小逢ふぞか乃関は申さじ

むかし孟嘗君がまだ夜の明けぬに鶏のそらねをさせて函
谷關をぬけいでしためしあれどあなたとわたしの間の逢
阪の關は決してうを偽りて通しませぬぞとの意なり或
る時清少納言が大納言行成卿と物語などして夜を深めさ
れたる時行成卿はこよびと物忌みあればといえき歸られ
しが翌朝清少納言のもとへつるはされし文を夜前は鶏の
聲もせつかれて早々歸りさふらふとありたる故清少納言
の返事に夜前へまた夜が深からんと存じたるに鶏が鳴き
たると仰せあると其の鳥は函谷關の事にていはんとあり
ければ行成卿いな左にあらず逢阪關なりとありければ此
の歌をよみて贈りしとなり

鶏鳴能敷函谷關吏。我胸中關門容易不可打破引証適切用
辭輕妙。

夜をこめてまだ夜の中なるに 鳥のそらね孟嘗君が函谷
關を逃れ出んとする時まだ夜が明けず關門閉ちてあるを
鶏の鳴き聲に驚く者がありて巧に關吏と敷き門を開け
せ逃け出たる故事を引きて行成卿がそら言に引きあて
しなり はかるども敷かんとあるとて 世も凡そ此の
世に於てそんなをいふ意 逢阪の關はゆるさば逢阪
此關と相逢ふことに用ひたるなり心にしなりあるゆゑに
迂闊にだまされて此の關を通すものでこかいとの意なり

左京大夫道雅 (六十三)

今も惟思むたえあんぞどかりを

人つてあらでいふとしをがふ

いひたきことは敷くあれどもいやかくなりてはしかたな
しせめては唯かもひ切つたといふことだけなりと人たよ
りをたのみす直に逢ひて話す道もありそうなものじやと
歎せしなり

心緒乱如絲我今一刀斷之情縁尚難尽我觀爲一場夢唯願
不假傳語す時相會語我心之切。

今もたい外の事こそさておき今となりては唯一つといふ意
思ひたぬなんどろなたの事は思ひきつたとばかりを

可なりとし其の言に従ひ表文の初
に臣は五代の太政大臣の嫡男なり
曩祖忠仁公より以來云々と歴世の

彙祖忠仁公より以來云々と歴世の
 官位顯達ありしことを述べて暗に
 我が不遇を陳述しければ公任は之
 を見て大に喜びたりと云ふ衛門も
 亦才女なるかな榮花物語は衛門の
 作なりといふ説あれども書中記す
 る所の年代と合はず眞偽判じがた

小式部内侍 (六十一)

和泉守道貞の女なり母和泉式部、
小式部を生みて後、夫道貞病死せ
るを以て小式部をつれて藤原保昌
に嫁したるなり小式幼にして敏操
和歌を能くそ人皆其の才を妬み小
式部の歌之常々つね母和泉式部の手に
成りしものなりと傳ふる者多し或

それだけありと人つてからで人のさよりをたのますに
いふよしもがな　じき／＼逢ふてはなすてだてもあり
ろうなもののじやどの意なり

權中納言定賴
(六十四)

朝ほらけち乃内霧多えくし

あらはれ渡りせ、乃弼代木

宇治川の朝景色をありのまゝによみたる歌なり夜の明け
方川一面にこめたる霧がだんぐたぐゝよなつてきて
あちらこちらの瀬にあじろ木の見ゆるさまはまことに
もしろきながめなりとの意なり

曙光始照水。煙霧漸暗處々現出魚簀來。宇治川之曉景。摸出逼眞。

朝ばらけ解前に見ゆ　宇治山城の宇治川なり　川霧川の
面をどぎこめたる水霧なり　たねぐに日の照るに從ひ
霧があらちちらどぎれ消ゆるなり　あらはれたる霧の
爲先はつゝまれて見へざりしものが見わたるなり　せ

せは源なりあちちこちりの浅瀬 銅代木魚を此の中に
追ひ込みて捕ふる筈なり宇治川の水中に多く之を設く

相摸 (六十五)

恨みわびほそぬ袖どにあづを乃を

戀に之ちふん名大に惜しけれ

人の無情なるを恨むあまりにわが袖は涙にぬれてはそへ
まさへもなきにまだ此上汚名の世に立ちろ口惜しけれど
の意なり

我恨常綿々。我淚常灑々。我心未通君。我名既上世評。

恨みわび人の無情をうらみ我が不幸をわびかこつなり

はさぬ補だにゐるものを源の爲めに補の乾くときもな

ふことゝ我が身がはかなき戀に身を朽ち果すことゝを遁

とせたるなり名こそ惜しけれ實際我が心がむかうへ通

式部重き病にかゝりし時よみて母
に示せし歌に

いかにせんいくべきかたもおも

はへす親にさきたつ道を知らね
ば

とあり此の歌のいくべき方は生く
と往くと通はせたるなど願ふ願ふ
ありし人と見ゆ此の如く當意即妙
の歌多し

伊勢大輔 (六十一)

大中臣能宣の孫にして伊勢の祭主
輔親の女なるゆゑ伊勢の大輔と呼
びしより和歌に巧にして才名また
當時に噪りし紫式部和泉式部小式
部等と共に上東門院に仕ふ八重櫻
の歌は一條帝の時奈良の都にあり
し八重櫻を或る人の献せしを其花
を題として歌を咏せとの仰せあり
しゆゑ即坐に咏みし歌なり其才氣
の程推知すべし

清少納言 (六十二)

清原元輔の女なる故清少納言とい
ふ少納言は官名なり一條院の皇后
定子に奉仕す父に似て和歌に巧な
り又文を能くす枕の草紙は即ち清
少納言の著はせものなり一日大に
雪ふりし朝皇后と香爐峰の雪と如
何といひ玉ひしに清少納言と直ち
に起ちて簾を捲き上げた人皆其
の敏慧を稱す蓋し唐の白樂天の詩
に

遺愛寺鐘歌枕聴

香爐峰雪撥簾看。

の句あるを以てなり此事ハ一説に
一條帝の御前にての事なりとあれ
ど枕の草紙によれば皇后の御前に
於ての事なりしこと疑なし清少納
言はより益々皇后の寵愛を受け内
侍に進めんとすの恩命あらんとせし

大僧正行尊 (六十六)

を浪雲にやはまき思へ山様
花を里外不知る人なまふ

山奥の事なれを訪ひ来る人とてもかく友とそべき者もな
くかまへも此の山奥にたいひどり咲き居ることなればさ
ぞ寂しうらんされば汝と我とは能く似たる境遇なれば相
愛し相友とならふではないかと無情の花に情を寄せしな
り
山深人跡絶。盡日何寂寥。唯有爛熳一枝櫻。此間相知汝與我。
もろともには汝も我もお互に。あはれと思へ。さぞさみしき
ことならんと推量してくれ。花より外に知る人もなし。花
を友とするより外に誰一人知人もないとの意なり

周防内侍 (六十七)

春乃夜の夢をか望むるに枕に
かゝるなく立たん名を惜まけし

此歌と二條院の月夜の夜人々多物語りなどして夜を
明したる時周防の内侍よりふして枕もがたと忍びやかに
云ふを聞きて大約言忠家之を枕もとてかひなを簾の下よ
りさし入れける時よみたるものにて短き春の夜にすこし
のま手枕したりとて何の甲斐もあきき浮名の立つがさん
ねんどこの意なり。ひなと甲斐なくと通はせたる所當意
即妙といふべし
君春宵一刻之情。誤。妾百年之名。觸。事。即成。歌。與。彼。小。式。部。大。
江山歌。其千古名吟。
春の夜の夢ばかりなる尤も短き夜の夢ほどの間なる手枕
忠家卿が枕にせよとて出せしかひなに枕すること。かひ
なく立たん何の甲斐もなきことに却て浮名を立てられて
はの意なりかひなと甲斐なくともじたり是れ此の歌の妙
處。名こそ惜しけれ君がしんせつを無にするにあらねど
浮名のたつことのみが口惜しいうらといふ意なり

三條院 (六十八)

心にあらで浮世にあらるを

も故ありて果さるる清少納言老
後には大に零落して又元輔が住み
しといふ村落の一破屋に閑居せし
が一日四五人の殿上人車を驅りて
門を過ぎるあり其の屋傾き壁破る
いさを見て嘲笑して曰く清少納
言も亦零落此の如く甚しきやと清
少納言家に入りて之を聞き藤を掲
げて曰く駿馬の骨を買ふやと是
は彼の戰國策にある郭隗が燕昭王
に言ひし語中にあることにして古
人死馬の骨を五百金に買ふ期年か
らずして千里の馬至る者三つとあ
るにより清少納言も我れ年老ひた
りと雖も若し之を用ひば必ず賢才
の人を得るに足らんとの意を述べ
已れの不遇を憤りしなり婦人よま
ては餘程賢才ありし人に見ゆ

大飛鳥のるべに夜半の月かお
是は三條帝が月に對して懷を述べられし御製にして此度
位を去らんとするの心がかが心より出でたるにあらずさら
ば位を去らばとて世に永らふ心はなけねどもし心な
らずも此のうき世に永らふことあらば禁中にて月を觀し
こよいの事が思ひ出さるゝであらふと禁中に月を賞する
はこれ限りなるかと思ふ玉ひしなり
明月揚清輝不似浮世海他日菟裘栖隱時應憶禁中今夜月
蜀世之情溢于詞句之間
心にもあらで自分の本心にもあらで面白くもかくうき
世にながらへばこの世はうきものなるゆゑ早く冥土に行
きたいと思ふて居れどもしもまだこの心配の多い世に長
生きするやうな事があらばこひしかるべき夜半の月か
な今夜禁中にて月を見しことを思ひ出してさぞ戀しき
ことであらうとの意なり

能因法師 (六十九)

あらし吹く三室の山の紅葉を

左京大夫源經 (六十三)

幼名を松君といふ儀同三司伊周公
の子なり長和五年從三位左中將と
なり万壽三年左京權大夫に遷り天
喜二年七月六十三歳にて卒す

權中納言定頼 (六十四)

大納言公任の嫡子なり寛弘年中侍
從右近衛少將を経て長元二年に權
中納言に任ぜられ長久三年に正二
位となり同五年に致仕し明年正月
五十二歳にて薨す定頼容姿秀麗に
して和歌に巧なり又能書の名あり
其の親より事ふること至孝をとし
云ふ一條帝大遷川へ行幸の時定頼
も亦父公任と共に供奉の中にあり
公任心切かに定頼が名歌を咏出せ
んことを祈りしに講師が朗吟せる
定頼の歌を聞くに

立田の川のにしれたるけり

立田川の水面にしきわたしたる錦と見しは能く見れ
ば三室山から吹き流されて來た紅葉であるとの意なり

三室山頭秋方深風吹紅葉片々急飛入溪流色更鮮龍田川
上錦燦爛

あらじ吹くあらし風の吹くこと三室山立田川いづれも
大和の高市郡に在りにしきなりけり紅葉が水面にしき
たるさまが錦と見ゆるかり

良選法師 (七十一)

やびまをに宿を立ち出で

おがむれぞ

いづとを同じ秋の夕暮

あまりさびしさにたねかね我家のみのかくまで寂しきか
とかもひて家の外に立ちいで見れば天下一般の秋にて夕
暮さまのけしきはどこへいて見ても同じことであるとの

水もなく見わたるかき大井川
とありて其の作太だ卑近ありしを
以て公任と顔色を變じて心を痛め
しが下の句の

みねのもみぢは雨どふれども
とあるを聞き思はず微笑を漏らせ
しと云長和三年定頼又一條帝に従
ひ春日の社に詣つ時に定頼行事た
り其の從者敦明親王の奴と闘争す
定頼之を制せず却て從者をして親
王の奴を毆たしむ事報聞に達し五
ヶ年間行事の職を止めらる其の他
藤原兼房と酒を飲みて争闘し源頼
定を嘲罵せしかと其の疵痕少から
ずと雖も其の父に仕へて至孝なり
しと和歌筆迹に巧なりしは世の譽
りて賞讃せし所なり其の正二位に
あはれしは宮殿の繪と書さしによる

といふ

相 模 (六十五)

源頼光の女あり相模守大江公實の
妻とありし故夫の官名に従ひ相模
と呼びしなり順德帝嘗て評し玉ひ
て曰く赤染衛門紫式部相模などは
昔しにも恥ぢぬ歌人なりと其の和
歌に巧なりしこと推知すべきなり

大僧正行尊 (六十)

參議源基平の子なり初め三井寺の
僧正たり後延暦寺の座主となり天
治二年に大僧正となり熊野三山の
檢校山伏修驗道の事を脩す初め行
尊三井寺に在りて少阿闍梨たりし
時雲水飄然諸國を遍歴し深山幽谷
足跡の到らざる所なく深く佛法の
奥義を悟りしと云ふ行尊は唯佛法
に深かりしのみならず和歌を巧み

意なり

秋夕蕭々殊甚獨坐不堪寂寥一試出離外去欲排我悶却是
到處荒涼覺悲秋情更十倍

さびしさにあまりとしてもさびしきゆゑに 宿をたらい
で家の外にこまた心をなぐさむるものもあらんかど家を
出でい ながむればそこい見渡せども いづいもか
し秋の夕暮秋の夕暮のけしきはどこもかあじことにてさ
びしきは我家のみならずとの意あり

大納言經信 (七十二)

夕やれど門田の稲葉おそづれて

と雲のまほや小秋風ぞ吹く

秋の夕ぐれが秋風がわが門の前なる田の稲の葉にそよ
よと吹て來たと見るまに結にてそろく吹きたるわか屋根
の上をも吹くとの意にて形なき秋風の吹き來るさまを能
くうつし出せり
門前稻葉動る聲をき秋夕暮屋上田家秋風之吹聲田家不
外されば日暮ふれば 門田わが門前にある田なり
葉おそづれて風が稻の葉にそよくとあたりて動くさま
をいふ あしのまろや蘆にてまろく暮きたる家にて田家
に多く見る所なり

祐子内親王家紀伊 (七十三)

者ふれたるしの源乃あな波を

のけ志や袖乃ぬまをこぼるを

かねて世間に評判の高き心替りする人に情をわけ誠を通
じなば後には心配多くて悲歎のなみだに袖をしぼらねば
なるまいとの意なり此の歌は中納言俊忠卿の
人知れぬおもひありその浦風に波のよるこそいはまは
しけれ

といふ歌の反歌なり

輕薄如君世間希妾身不許輕薄人眼前情交忽冷却他年唯
贏双袖涙

音にさくかねく 噂に聞て居る たかしの濱攝津に在り

にし又書畫を善くす假名の手本な
る世に傳へりて人の賞賛する所
にして人丸の像は世に名高し又嘗て
鳥羽帝の時宮中管絃の宴に侍し花
園左大臣が奏せし琵琶の緒の断れ
たるを見て懷中より緒を出して之
を奉り大に其の用意の周到なるを
賞せられしことありといふ

周防内侍 (六十)

周防守平繼仲の女なるを以て周防
といふ後冷泉院の女房たり一説に
は白川院の女房ともいひ又堀川院
の女房ともいふ孰れか真なるやを
知らず蓋し當時閑秀の一人たりし
や疑ふ

三條院 (六十八)

冷泉帝の第二子母は贈皇太后藤原
超子太政大臣兼家の女なり御母と

といふ上に音とありし故高しと受けて評判の高きことに
引き用ふ あだ波あだなる心に喻へしなりよく心變りの
することかけしやは情をかけまことを通せぬといふこと
袖のぬれもこそすれかやうな心の多き人にもし契りを
こめたならば涙に袖のぬるゝやうな悲しき目も逢ふは知
れて居ると云ふ意なり

權中納言匡房 (七十三)

高砂の屋上の様を記にけり

外山の霞た、すゑあらふん

此の歌は遙に山上の櫻をながめてよみしものにて高砂の
山のいただきなる櫻が咲いたから其の山よりこなたに低
き山に霞にたゝすにあらせたいとの意なり
前嶺簇々櫻花開爛然映雲一段景青帝若憐詞人意勿下起經
霞掩前山
高砂播州にある高砂にあらす山の總名なり 尾上は山の
頂上なり 外山は手前にある小山のことなり たいすい
かふい霞がたつとさき所前なるたふしの櫻が見へぬゆゑ
さうか霞がたゝすにあらせたいとの意なり

源俊賴朝臣 (七十四)

うかまける人を泊瀬乃山おろし

はげまかれや新らぬものを

むかふの人があまうつれなかりし故その心のとけるやう
に神かけて祈りこそすれ泊瀬山の風にはあらぬをむかふ
のこゝろの前よりもきつくあやうにとは少しも祈らぬ
まこの心が神に通せぬことうはて合点の行のぬ事じやと
の意なり

神前凝思何所新雅願春風融三郎心如今却是秋風急吹斷一
片相思情

うかりけるわれに氣強き人といふが如し 泊瀬の山か
ろし大和の長谷の觀音なり古は何事も此處に祈りしもの
と見ゆ下の句のまげしを起すために山おろしと言ひうけ
なり山おろしは山を吹きおろす風なり はげしかれと男

能因法師 (六十九)

俗名を橘永愷(ながやす)といふ橘

左大臣諸兄十世の孫江守忠望の
子なり養はれて肥後守元愷の子と
かる少時嘗て文章生となり肥後の
進士と號す天性和歌を好むこと食
色よりも甚しく其の行爲超凡にし
て人を驚かすもの多し故に其歌も
亦神韵縹渺として脱俗の妙あり嘗

て歌人藤原長能に詠歌の秘訣を尋ねしに長能は

山深み落ちてつもれるもみちば

のかはける上に時雨ふるなり

と詠じければ大に感服し是より長

能を師として和歌を學ぶ永徳後嗣

變して融因といひ又能因と改む津

の國古曾部に住みしゆゑ又古曾部

の入道とも云ふ毎年櫻花の時節に

は都に上り大江公資の五條東洞院

の家に寓し其の南庭にある櫻樹を

賞するを樂みとす其の風流思ふべ

きかり能因は平素極めて小食なる

人にて來を食せず唯少許の飯を食

ふのみなりしと一日兼房能因と車

を同じくして二條東洞院を過ぐ能

因候に車より下る兼房怪しみて其

の故を問ふ能因曰くこゝは昔し伊

勢の御の古跡あり松原思ふ處にして

今尚ほ存せしに無祠にして過ぎん

やと徒行すること數百歩其の松影

の見へざる所に至りて又車に乗る

其の古人を敬むること此の如し又

藤原節信なるものあり好事の人な

り一日能因と會し相得て歡ぶ能因

曰く今日始めて君に面を好するに

此品を以てせよと錦囊を懷より出

そ中に錦屑一片を納む曰く是れ長

柄の櫛を造りし時の錦屑なり我れ

之を秘藏すること久し今日始めて

之を君に示すと節信大に喜び我れ

も亦君に示すべきものありとて懷

中より紙に包みたる者を出す之を

開けば則ち井出の蚌の乾涸したる

の心が前よりも一層きつくなるやうにどの意なり 祈らぬものをさうと祈らぬに此頃却て男の心の前よりもきつくなりしやうに見ゆるは我心が神に通せぬとかどの意へ

藤原基俊 (七十五)

ちぎりおねえさせえの

命を命にて

あえれおせしの秋をいぬめり

此歌は基俊が愛子光覺に維摩會の講師をつとめさせたくおもひ太政大臣忠通公へ願ひしに度ふもれて外の僧と定まりけれないうにやと之をうらみけるに忠通公は彼の清水觀音の歌

たいたのめえめじが原のさしもぐさわれ世の中にあらんるぎりは

この歌を示しわれ此世にあらん限りハ光覺を講師にしてやらんと意を示されたるゆゑことしころことたよりにせしふ又其意に漏れたる時に作らし歌なり歌の心はうね

てお約束ありししめじが原のさしもぐさわ云々の事を命とも思ひて今日まで待ちわびしにあまりふびんでござらぬか今年の秋もどやくれなんとして維摩會も終りたるに御採用下さらぬとの意なり

唯頼君千金一諾の日待金風白露時約諾未果誠如何落葉紛々秋又暮

ちぎりかきしかねて御契約ありし通りといふ意下に露といふことあるゆゑたきしどかけたるなり させもが露させもはさしもなり忠通がいひしえめじが原の歌の文句を

抜きとりて必ず講師にしてやらんと約束との意をいひたるなり いのちにて命よりも大切にねもひて待つて居

つたふといふ意なり あはれあまりとしてもふびんでこないか ここの秋もいぬめり秋もはやくれはてんどするに約束通りして下さらぬとの意なり

法性寺入道前關白太政大臣 (七十六)

わたの原ふぎ出て、見れは久方の

雲井ふまがふ沖つ白波

都をば霞と共にならしかど秋風ぞ吹く白川の關
 といふ歌は實に千古の名作なれども能因實際白川の關へ行きしにこあらす我身都に居りなから之をよみたりといふて面白からずと思ひ戸を開きて家に盤居し窓に穴を開き日光にあたりて顔色を黒くし程經て奥州へ修行に赴き旅びやつれせしやうに見せて此歌を公にしたりといふ其熱心の程實に感ずるに餘ありと謂ふべし玄々集、八十島の記、歌枕等皆能因の著なり

眞運法師 (七十)

其の父祖評ならず或説に祇園の別當にて母と實方の家の童女白菊なりと都の北三里外なる大原村に舊

みしといふ處で
 大原やまたすみがまもならこねば我宿のみぞ煙たねぬ
 といふ歌を作り知人に送るて物を請ひしといふ其の清貧の狀想ふべし後俊賴朝臣眞運の舊房を過ぎて下馬せしことあり其の舊房今尚ほ存し其の障子に記るせし
 山さどれかひもあるかな時鳥こそしも待たてはつねきゝつる
 といふ歌は其遺音を残せり風流韵士の來り訪ふ者もありと云ふ

大納言經信 (七十一)

六條院右大臣重信の孫にして機中納言道方の第六子なり博學多藝にして殊に和歌を能くし藤原公任と名を齊しくす禁中和歌の會あるごとに隨に待せざるはなし常に序者

望みはてなき大海の中に舟を漕ぎ出し見れば濱邊のけしきとはまた格別にて白波が天に接しどちらが波をちらがそらと見分けがたきはどであるとの意なり
 一葉片舟萬里之海四顧渺茫水天勢隔與淺渚近岸全異風光
 わたの原はひろくとしたる海原あり漕出てい見れば大海の中へ舟を乗り出して四方を見渡せば雲井にまがふ雲井はそらのことまがふは見まぢがふことなり沖つ白波沖の白波といふ意なり

崇徳院 (七十七)

瀬をまやみ岩ふせのる、瀧川乃わきてを末に逢はんぞおとふ
 かなじく流れ居たりし水が岩にせきわけられえはしは別れても末終に相合ふて海に入る如く今は人にせかれて別れて居ても後終に相逢てむつひ語らふことあらふとの意なり

如今含み瀬五相別時堂無三合數時一淡瀧瀧石相枕瀧終歸海々大海中
 瀬をはやみ淺瀬の流のはやさといふこと 岩にせかるい水が岩ふせきとめらるゝと 瀧川は溪間ある流のきつき川なり われても水が石ふせかれてゆくつにも分れること人の一時相別れて種々の苦勞をかそに喻ふ 末に逢はんぞ

源兼昌 (七十八)

淡路島のとふ千鳥乃鳴と聲は
 徹夜寝ざぬをま乃せたり守
 須磨浦より淡路島へ通ふひら千鳥の聲を聞く時こそことに哀れを感じて旅の假寐の夢を結びがたきに常に此處に住む關守は毎夜之を聞きかゝることなれば定めて此の聲の爲めに夢のさむることも多からふとの意なり
 海禽呼友聲旅客夢屢驚借問須磨浦上守關人幾夜爲之破清夢

判者たり承保三年十月旬日帝大堰
川舟遊の時に詩歌管絃の三船を別
ち各其長技を闘ひさしむ經信後れ
至る帝之を悦び王をす經信河邊に
立ち呼んで曰く三船何れなりとも
岸に寄すべしと遂に管絃の船に乗
り詩歌を咏じて獻せしを以て帝も
大に嘉賞し玉ひしと後世之を稱し
て經信三船の才といひ公任の事と
並び傳ふ後一日帝經信を召し玄泉
牧馬といふ二つの琵琶を出し經信
をして之を彈せしめ問ひて曰く二
者何れか優れると經信曰く器の優
劣にあらすして人の工拙に在りて
二者交々彈せしに何れより劣りな
かりしといふ經信と唯詩歌管絃に長
ずるのみならず又處務の才ありて
決斷に當りて承暦四年高麗王恩賞

淡路島南海道に在る島須磨浦と相距ること近し千鳥の
鳴く聲に千鳥の鳴く聲とあはれを感ずるものなるゆゑに
幾夜ねざめぬ定めていくばんも寐さめをすることであ
らふ須磨の關もあり須磨の關の番人なり

左京太夫顯輔 (七十九)

秋風ふるあびく雲の絶るを望

これ出る月の影のやけを

風秋のため空にたなびける薄雲がきれ〜になつた間
より漏るゝ月の光の一しはあざやかであるとの意なり
秋風吹天漢淡雲斷又續明月漏清輝清涼更一番
たなびく雲うすくひきわたりたる雲絶間より雲が風
吹かれてきれ〜になる其のすさまじい意なり
もれ出る月隠れて居りし月か忽ち形をあらはすさまを形
容してもれ出るといふ影のさやけさことさらあざや
かること

待賢門院堀河 (八十)

あがのらん心を知らず髪を

乱れてけを物とみぞ思へ

人の心は末長くかはらぬかは知らねど何となく行末の案
じられてけさの別れがつらく黒髪は乱れし如く心も乱る
いといふ意あり
偏望情交如髪長封是心緒乱如髪我髪尙可理我心不可理
亦是與俗曲黒髪同一意趣
ながからん心もしらず人の心が末長くかはらぬかはる
かしかとほはせねど亂れて黒髪のねみだれしと心のもつ
れたるを通過はせていひしなり物をこそ思へ長くつ
ゐぬにきまつて居らねば左程案じるに及ばぬかは知らね
ども何となく心配であらぬとの意味なり

後徳大寺左大臣 (八十一)

杜鰲おれたる方をなかむれど

暗あまあけの月ぞ残れど

夜の深くなるをも眠はずはとぎすの啼聲を聞うんと待

り後遂に難後拾遺遺を著して其の疵瑕を指摘せり經信寛治年中正三位叙せられ嘉保元年太宰權帥とありて翌年西府に赴く途に筑前の縫田驛に宿す其夜偶々八月望日に當り月光殊に清麗庭前に柳樹あり月光を遮る經信命じて之を伐らしめ終夜琵琶を彈じて月を賞せしと云ふ其の風流英氣概ね此の如し承徳元年八十五歳にして太宰府に薨す其の子基綱基頼二人共に歌を能くす

祐子内親王家紀伊 (七十三)

祐子内親王の後朱雀院の皇女なり紀伊は平經方の女紀伊守重經の妹にして祐子内親王の御家に仕へしを以て祐子内親王家の紀伊と呼ばしなり又一の宮の紀伊とも云ふ又

關系の一入なり

堀中納言匡房 (七十三)

匡房の祖は大江省人なり匡房寛治八年權中納言となり永長二年太宰權帥となり後正二位叙せられ大藏卿となり七十一歳にして薨す匡房幼より才智人に勝れ四歳にして始めて書を讀み八歳にして史記漢書に通じ十一歳になりし時に父成衡に従ひ土御門の大臣を訪ふ坐間詩を作つて獻す事叙聞に達し學問料を賜はる是より名譽日に揚れり又嘗て關白頼通が宇治平等院の門を北面にせんとせし時匡房は和漢の故例を引きて答へしにより大に其の強記を歎賞せられたり匡房それより文章得業生に補せられ對策に及第せしも自ら才を待みて世を

ち受け居りやれ啼いたと一聲聞くや否や窓をあけておがむれば其の姿は見へず唯有明の月のみ見ゆるその意なり杜鵑一聲何處邊天上唯剩一片月聞鶯聲驚起開窓之狀寺桃青翁一聲何同工異曲

道因法師 (八十三)

思むわむをてを命のあまをのを

うたふたへぬえ涙ふりけり

十分に思ひつめて胸の切なさはいふにいはれぬはかなれささりとて死にもせずなほ生きて居るにたいこらへされぬ涙にてさう思ひ變へても涙は落つるその意なり千愁万苦纏此身一縷命脉今尚存幾度欲忘不能忘唯是難禁双行涙思ひのひ十分に思ひてその意

を死にさうなものなれどそれでもをが生きて居るにその意うきになへぬと心配の爲めにさうしてもこらへられぬせぬことといふ意なり

皇后宮大夫俊成 (八十三)

世乃中と道大控ふけれ思む入る

山の奥に鹿を鹿ぞふくふる

山奥へでも隠遁せば浮世と隔たりて悲しきことも憂きこともなきかと思へささて来て見れば鹿の啼き聲に悲しみを感ずるさて此の世の中も心配や悲みなき所とてさあきものかどの意なり

休言山林與世隔幽々鹿鳴足催愁市朝既非山亦非人間何處是樂卿

世の中よなんとしたらよきことやらはんはんにこまつた世の中よとの意なり道こそなけれ世の憂きといふことを忘るべき道はなきものとの意思ひ入る山の奥のよからふと一隨に思ひ込むといふ意山の奥にもしかなくなく

憤り述を山林に晦々さんとしす權中納言經信之を知り命世の才を懷きながら山林に隠遁せんとするは自ら愛せざるの甚しきものなりと切諫せしを以て終に隱遁の念を絶ち三條白河堀河の三帝に歷仕し官位益々昇進す承暦年中彼の高麗が醫を請ひし時の返譯に匡房の草せしものなり其の文中に

双魚難逢鳳池之溟。

扁鵲登入雞林之雲。

どの句あり人皆之を傳稱を後韓人の長崎に來りし者此語を紳に書しありたりと云ふ匡房和歌よりは詩文を以て世に名あり江家次第二十卷に匡房の尤も心血を注ぎし所の大著作なり少き時秋日閑居の賦を伴る藤原明衡之を賞して曰く其の

辭義然たり然する者なからんと又或る時殿上に遙遙す官女之を見て匡房の不風流なるを笑こんどて琴を出して之を彈せしむ匡房直ちに左の歌を咏せり

あふさかの關のこなたもまた見ねばあづまの事も知られざりけり

と蓋し和琴をあづま琴と呼ぶを以てなり官女皆其の才に感ぜ答ふる者なりしと云ふ匡房老後髪を剃り天永二年七十一歳にて薨す世に之を江帥と云ふ彼の八幡太郎に向ひ好男子惜らくは兵法を知らずと曰ひしは即ち此人なり

源俊賴朝臣 (七十四)

大納言經信の第三子あり始め右近衛少將に任ぜられ木工の權守右京

るさて山奥に來て見ればこゝにも悲しみの種なる鹿の啼き聲がするゆゑやはり心ををきみだせことじやぞこへ往けばよきやらどの意なり

藤原清輔朝臣 (八十四)

あがらへむまた此頃や

老乃ぞれむ

字しを見し世ぞ念を去れし記

今現在はいやでならぬけれども又後日になつて見れば却てあの時の方はよつたと今日の事を戀しく思ふ時がある何故とならばいやでならぬと思ふたむろしの事が今戀ひしき故とどの意なり

勿謂今日不堪憂悶他日亦必有追思今日之時昔日辛苦之事今日却慕之湊合過去現在未來在二首之中措辭絕妙永らへば今は憂きに耐へぬけれどもまた後になつて見たならんとの意またこの頃や忍むれいひやでたまたまねと現在思ふて居る今日の事が戀しくなるであらふ

いふ今これはいやな事はないと思ふた時も今はいひいさ今なら見れば却てこひしきこゝちがするとの意なり

俊惠法師 (八十五)

夜ををから物思ふふろえ

明けやらぬ

関のひまをへつれなを里けり

待つ人は來らずくよくと物思ひしながら居る夜にはあやにくに夜の明けるのが遅きこゝちして情なきは人のみからで関のすきまさへ情れなくてはやく明りがさゝぬとの意なり

徹宵待君々不來寒燈別盡光明滅今宵何爲夜殊長却恨戸隙曙光遲

夜もすから夜通しといふこと物思ふ頃は人を待て物思ひをして居る時にはといふこと明けやらぬはやく夜が明けたらまたさされることもあらふと思へど容易に明るくならぬ関のひまをへ関の戸のすきまから曉の光りの

太夫を兼ね進みて從四位上に叙せらる俊賴歌を咏するに沈思熟著意匠慘澹として敗て輕卒に筆を下さず一首成ること之を壁に貼し反復朗吟し意に適して後之を人に示す故に其の咏する所人の意表に出る者多し或時藤原實行藤原長實と躬經貫之の優劣を論して決せず之を白河法皇に稟す法皇之を俊賴に問としむ俊賴曰く躬經を輕くしく思ふ勿れと長實曰く貫之を勝れとするや俊賴を輕くしく思ふ勿れと蓋し深意を其中に寓せしなり此頃禁中及び諸公卿の家に於て歌合ある時には必ず俊賴を推して判者となす俊賴常に曰く和歌を判する者こそ徳を備へざるべからず所謂の門地無明數記の類なりと其

の思ふべきなり俊賴常に連歌を好まず其の厭体を傷ふを以てなり然れども已れの好惡を以て人の美を掩ふを欲せず金葉和歌集を撰みて多く連歌を載せたり時に藤原基俊亦和歌を能くし俊賴と善からず基俊嘗て俊賴を毀りて曰く俊賴女才なくして和歌を能くそ譬へむ猶ほ馬の能く道を歩むが如しと俊賴之を聞て曰く文時朝綱に秀歌あるを聞かず躬經貫之に名詩あるを聞かず我が女才なしとの評は能く當れりと其の温厚又して物に逆はらざることを概ね此の如し故に人皆之を尊敬し譽望當時に隆々たり俊賴の家集を散木葉歌集と云ふ蓋し莊子の語を取りて無用の木といふことを表し謙退の意を寓せしなり

さしこむことぞれさへも つれない、かりける人のみならで戸のすきままでもわれにつれなくてはやく明りがさゝぬとの意なり

西行法師 (八十六)

なけ、ぞて月やま物をとおるまを

のまら顔ある我涙かま

月を見てゐるしめと月のいひつけたるにあらす何のこゝろに憂あればこそ月に對して悲しみをかこすなれそれに月を見たるために悲しく涙が落つるやうにかこつけるは我ががら解せぬとの意なり

我心有喜對月而喜我心有悲對月而悲一喜一悲在心不

在月却言看月不堪悲不知我心招之真是悟心機之語

なげいとて悲しめといふて 月やは物をおもはする月が

人にいひつけて物思ひをさすのでないにいふところなり

月やの字は助字にて深き意味なし かこち顔なる我、涙かまらるに月がかけといひつけたやうにかこつけ顔

寂蓮法師 (八十七)

村雨の露をまどむぬ櫓の葉に

たりあちのぼる秋の夕暮

まがりたる櫓の葉に村雨のふりろゝぎやがて夕日の照りわたりまだ葉の上の露もかわかぬはなるに霧のたちのはる秋の夕暮のけしきは何ともいへぬながめじやとの意なり

雨洗山村須臾深樹蒼々露未乾殘照影斜暮色催霧生翠葉滴露中

村雨ざつと一としきり降る雨をいふ 露もまたひね雨が晴れてからひまなきゆゑ露がまだかわらぬなり 霧たちのぼる夕日が雨に沾ふたる樹葉を照らし霧が其邊よりたちのぼるなり

皇嘉門院別當 (八十八)

難波江のあしのあり根の一夜申る

俊頼の子俊惠亦歌を能くす後藤原
俊成之を評して曰く俊頼の歌は鍛
鍊精巧にして疵瑕め指摘すべきな
し俊惠の歌亦巧なりと雖も其の父
に及ばざること遠しと

藤原基俊 (七十五)

細河右大臣頼宗の孫正二位右大臣
俊家の子なり従五位左衛門佐たり
後發覺して覺舞と稱せ基俊天性文
才に富み和歌を能くし又兼ねて詩
を能くす才を待みて一世を蔑視し
好みて人を批難せり故に人の怨を
受けしこと亦多し藤原俊成は基俊
の弟子なり故に後世二條家の和歌
の祖を基俊となすと云ふ基俊常に
俊頼の下風に立つことを好まず屢
々其の歌を批難を嘗て某邸乃歌合
に際し俊頼の

つもふも人に見えけるもの
を

この歌を評して曰く田鶴は澤にこ
そ鶴め雲に栖むとは何事ぞと遂に
之を負とす而るに此の俊頼の歌は
鶴を咏せしに非ずして鶴の事を咏
せしなり基俊之を察せず輕々しく
之を評ふ大に世人の笑を招きしと
云ふ基俊又琳賢と惡し琳賢嘗て
基俊を愚弄せんと欲し後撰集にあ
る歌二十首を採萃し之を基俊に示
す基俊之を知らず頼に之を批難し
識者の笑を買ひたり要するに基俊
は己の才を待み人に傲りしを以て
其の欠点も亦頗る多かりしならん
基俊一日城外を逍遙せしに一古堂
あり六七歳なる童兒其の傍に戯る
基俊問ひて曰く此の堂を何とぞ稱

みをつとゑてや戀わたるべし

旅宿に逢ふ戀といふ題ありふかき契りあるにもあらでた
い旅宿にて一度枕をかはしたることを忘れられずして一
生涯戀ひ暮めて月日を渡るとの意あり
旅館一夜情戀々不能忘痴蝶尙慕芳不知春色過
難波江攝津に在り古は蘆多く生せしものと見ゆ あしの
かりね 短き間の旅の假寐といふこと刈根と假寐とかよ
とせだるあり 一夜ゆゑたつた一夜の契りゆゑに みを
ついでてや身を尽すと涙標とかよはせたるあり 戀わた
るべき戀ゆゑに一生をわたるありわたるは水の縁よりい
ひたるあり

式子内親王 (八十九)

玉の緒とゑえおゑえね

ながらへぞ

思ふるおののわらふをぞ

いつ今の中に玉の緒をたねて死ぬる方がましやあき
なる此上生きて居ても胸は思ふことをついみきれずして
顔にあらはるゝこともあらふからどの意あり

胸中常貯無根思一片真情何縁通不怨我命今夕終長生不
忍憂悶多

玉の緒玉は魂あり緒にてつなぎたまふれば人の命のこと
あり たねおばたね玉をつなぎたる緒のきれることに
て我が命なきものならばいつぞ死んでしまふがよいとの
意なり すがらへはこのまゝひりに命をながらへたりと
て 忍ふることのよわりもどする胸の思のつゝみきれず
して顔色にあらはれ又は病を起すことなどあると今より
知れてあるとの意あり ながらへよわりなど皆緒の字よ
りうみ出したるあり

飯富門院大輔 (九十)

みせぞやあ雄島のあまの袖たふを

ぬれにぞぬれし色えかえらじ

するやと童兒曰く壯堂なりと基俊
即ち口吟して曰く

此堂之神の佛か覺東かな
と童兒忽ち答へて曰く

法師ここにぞ問ふべかりける
と基俊大に其の頓才に驚きしと云
ふ基俊著す所の書は悦目抄新猷仙
新撰朗詠集相撰立等なり

法性寺入道前關白太政

大臣 (七十六)

關白忠實の子藤原忠通より正二位
權中納言より累進して終に攝政關
白となり康治三年上表して關白を
辭し應保二年六月法性寺にて出家
す時に年六十七歳翌年二月に薨す
弟頼長の事に由りて父忠實と惡し
然れども忠實が頼長の事に坐して
流に處せられんとするに當りて

我にぎぎを鳴くや

後京極攝政前太政大臣 (九十二)

夜夜のさむし後ふ

衣かたし我獨里かを祢ん

さきざりすが床の下にて鳴き寒さは身にこれゆる霜の夜
にさきなる露の上で露もなかり衣をうちかけてたゞは
の意なり
とる寐るときさびしき言ふにいはれぬことである
夜深霜威加蟋蟀切々鳴葉席歌孤枕衣薄不堪寒
さきざりすが秋の頃多く床下にて鳴くものなり 鳴くやの
やは意味なし さびしうは小籠かり霜夜の寒さと通はし
たるなり 衣かたしき夜具をもしかず着ておる着物をひ
つかけてといふこと 獨かもねん誰れる話し相手でもあ
ればまたまざれることもあらんにたいひとる寐るときさ
びしき事じやとの意なり

二條院讃岐 (九十三)

我袖を垢干し見えぬ沖の石乃

人こぞ知ら祢乾くまをふし

潮水が引きても水の面に見へない沖の中の石といつもぬ
れがちなるが我が袖もそれと同じく人は知らぬけれども
悲しみの涙にかわくひまがないとの意なり
我涙日賤々我袖無乾時君不見潮落水溜時海底巖角終不

崇徳院 (七十七)

諱は顯仁鳥羽帝第一の皇子御母の

待賢門院なり保安四年二月五歲にして即位保元二年七月仁和寺にて崩愛し玉ひ同年讃岐に還幸あり長寛二年八月彼國にて崩じ玉ふ初め鳥羽帝の寵姫得子皇子體仁を生む鳥羽帝深く之を寵愛し玉ひ崇徳帝の養子とすし遂に立てゝ東宮とすし自ら髪を剃りて法皇と稱し玉ふ次で崇徳帝に逼り位を皇子體仁に譲らしめ玉ふ之を近衛帝とす時御年始めて三歳にして政權は法皇に在り崇徳帝は御年二十二歳にして讓位の事は其の素志に非ず當時之を新院と稱するくて久安六年三月藤原多子を以て近衛帝の皇后とす多子は藤原頼長の養女あり頼長の兄忠通も亦藤原皇子を養ひて子とすし削れて中宮とす是より

見
盤干、見ぬ潮が引き退きても深き水の中にある石は見ぬといふこと 人こそ知らね常々水中に在りて水面に見ぬゆゑ人こそんか石があるとも氣付くぬ我が心の情人に知られざるに喩ふ かわくまもなし石が水の爲めに濡れかちあると涙のために我袖のたぬすぬるゝとに通はせたるあり

鎌倉右大臣 (九十三)

世の中は常にちがひを治めんと

あまの小舟のついでかきしを

海士が濱邊にちかき浅き水に小舟を浮べ綱をつけて之を曳くさはいとも長ある所ありて面白ければ此の世にある中には幾度もこゝへ來てかゝる景色を見たいとの意あり
風日晴美片舟浮つ前落漁父曳し線、欸乃相應頼長占此風景忘れず世繁元

世の中は世の中よ生きて居る間はといふ意 常といふ意 といつとも頭はくばといふ意 渚こゝ濱に近き水の浅き所 あり つなで綱手なり水浅きゆゑに舟は綱をつけて之を曳くなり京都の高瀬川の船の如し かかしもいふにいへぬ面白みあるといふこと

参議雅經 (九十四)

ふと志野乃山乃秋風やとふけて

ふるやを寒く衣持はるる

夜がふけたりみよし野の山の秋風が身にしみわたるころ衣をうつ聲の風にひくいはいとも哀れにねばゆ此の寒夜又衣をうつつて定めて冬の用意をそるにやあらん寒むさも追々と増して來たわいの意を含む
芳野山頭秋方闇夜深寒威襲身來可知名田家授衣忙處々砧聲響秋風
みよし野みと御ありはめていふあり さよふけて夜の深くたけたること ふるさと昔しは吉野に離宮もありしゆ

敵して曰く兵と神速を貴ぶ勝を一
舉に制するは夜攻に若くはかしと
頼長斥けて其計を用ひず既にして
義朝清盛等來りて白河殿を圍み攻
む頼長大に狼狽し爲朝の用を爲さ
ざるを恐れ急に爲朝を拜して藏人
とささんとし爲朝大に怒りて曰く
今日の急は敵を亡ぼすに在り吾は
鎮西八郎にて足れり何ぞ官を拜す
るに及ばんやと直に出で西門を
守り平清盛之を攻む爲朝射て其二
將を斃す清盛恐怖して退く爲義も
亦能く防ぎ勝敗未だ決せず義朝即
ち火を放ちて戰勢を助く偶々西風
砂を飛ばし火勢猛烈烟烟宮を蔽ふ
宮中の士卒皆狼狽して戰志なし官
軍勢に乘じて之を攻む白河殿遂
に陷し新院と稱意山に逃れ次で藏

前大僧正慈圓 (九十五)

おほけなく浮世乃民におほふかふ

我たつれふ果ぞ老乃神

徳もかき愚僧には不相應にて勿体ないが天下万民の上
墨染の衣をかはひおけて其の無事長久を祈らんために叡
山に住むわけであるとの意なり

徳薄才乏不自揣之罪因難辭唯爲祈天下万民之長久奮然
願法衣入深山眞是高僧之言

我はけなく勿体ないがといふ意 浮世の民にたはふかふ
世の中の万民の苦患を救はん爲めにといふ如し 我たつ
柿 叡山の傳教大師が叡山に中堂建立の時阿耨多羅三藐
三菩提の佛たちわかつ柿に冥加あらせ玉へてよみしよ
り叡山の事を我たつ柿といふ すみ染の袖住ひと墨を通
はせたるなり

入道前太政大臣 (九十六)

花をばふあらし乃庭乃雪ならぞ

ふ里乃とをのち我身ふ里けり

咲きみてる花に風が吹くときは花の落ちちるさまは雪う
と見ゆるがうのふり行くものい雪にはあらで年々歳々落

花と共に老へ行く身の白髪であるとの意なり
休言落花飛如雪白髪紛々不勝多聚花雪與白髪在三十
一字中無限感慨

花さそうあらしが花を吹き落すさまは早くちれど誘はぬ
ばかりかるゆゑ又花さそうといひしあり 雪からて花の
散るさまは雪の如く見ゆるも雪でこかいとの意 ふり行
く降りと年の経り行くとかよはしたるなり 我身かりけ
り年毎に老衰して頭髮が白くあるとの意を含む

權中納言定家 (九十七)

来ぬ人をまつほの満の夕なきふ

源兼昌 (七十八)

敦實親王六代の孫美濃守俊輔の子
にして從五位の下皇后宮の大進た
り其の事歴詳ならず

左京大夫顯輔 (七十九)

正三位修理大夫顯季の子なり保延
元年從三位となり次で左京大夫と
かる後正三位に叙せられ久壽二年
五月出家を顯輔の父顯季之和歌の
名人にて其の風格自ら一家をなし
常に人麻呂の風を慕ふ時に白河帝
秘愛の人麻呂の畫像あり藤原兼房

が夢に人麻呂を見て其の夢中の像を畫きしものなり顯季切に請ひて之を借覽し左衛門大夫信茂をして之を模せしめ源顯仲に之を賛せしめ源俊賴始め其他の歌人を招きて人麻呂の影供をなし年々贈ることなし帝其の篤志を嘉賞し玉ひ地を讃岐に賜ひ人麻呂影供の祭田となさしめ玉ふ後に白河帝の御物へ回祿の災に罹りたるを以て顯季深く此の畫像を重寶とし誓ひて曰く我子と雖も和歌を善くせざる者に之を傳へしと而るに末子顯輔殊に和歌に秀でたりしを以て遂に其の寶を譲り受けたり顯輔が和歌を巧にせしこと推知すべきなり世に傳はる所の詞花集と顯輔が勅を奉じて撰びしものなり顯輔成り亦朝

從二位家隆 (九十八)

風吹とくふらの小川の夕暮を

みぢねを夏の志留しお里ける

ならの小川の夕景色は風そよよと吹き來り秋かと思ふはなれなきのさきのあるを見ればまだ夏であることが知

り顯輔の委子となり名を顯輔といひし頃には顯輔の風体を學びしと云ふ顯輔は六條鳥見の家に住みしを以て後世顯輔を六條の和歌の一流と稱す

待賢門院堀河 (八十)

待賢門院の大納言公實の女にして白河帝の后瑋子なり堀河は待賢門院に仕へし女房にて神祇伯顯仲の女なり和歌を善くし其の名當時に高し家集一卷あり世に傳はる

後徳大寺左大臣 (八十二)

後徳大寺左大臣名は實定大炊御門右大臣公能の子なり祖父實能を徳大寺左大臣と曰ひし故に後徳大寺左大臣といふなり壽永三年内大臣となり次で右大臣となり文治五年七月左大臣となり建久二年六月薨

るいとの意なり
清風吹水面風色殊清涼尚存夏趣遙知秋未來。
風そよよ風がそよよと吹くことなり下の櫓の字にかけたるなり 櫓の小川山城に在りといふ みろぎとは河坂のことなり六月に之を行ひ河神の靈を祭る 夏のしるしなかりけしきははや秋と思へるいは涼やかなれど六月に行ふといふ御飯をせしあとの残りあるを見れば夏といふことが知れるとの意なり

後鳥羽院 (九十九)

人をおし人を怨免志あぢねふと

世を思ふ申る物思ふは

世の中の政道をみるにわが心も染まぬおとも多いが何某が生きて居つたら相談もしやうものをそれの死んで居らず又何某さへ居らねばかゝる事もあるまいに彼は政權を握りて我がまゝをなし居るがうらめしななど物思ひがたへぬとの意なり

を翫りて如圖と稱す實定天性明敏にして和歌を善くし常に歌人を集めて吟咏し以て自ら娛び西行法師も亦屢之を訪ひしと云ふ實定が住吉神社に歌合せありし時の歌に社頭月といふ題にて

古りにける松ものいはいどひてまじひかしもかくや住の江の月とあり判者藤原俊成殊に深く此の歌を賛美せしと云ふ

道因法師 (八十二)

俗名を敦頼といふ内大臣高藤の裔なり崇徳院に仕へて從五位左馬助となれり道因深く心を和歌に注ぎ毎月徒歩して住吉神社に詣で名歌を詠し出さんことを祈り詠七八十に及ぶも尚ほ怠りしことなし嘗て或る歌合のありし時道因の歌負て

逝者去不還存者不適意人事皆不知意憂世思國何緣散
我戀

人もをし死んでしまふて今居らぬ人よ惜しむべき人があ
る人もうらめしい今生きて居る者の中にわが心にうまぬ
者があるそれが權威を振ふがうらめしいあぢきなく何
等の楽しみもなくよくとして居る意なり世を思ふ
この世をかもしろくないと思ふこと

順徳院 (百)

を、老死や古死の死だの

老のぶにを

おほあまうあまわかしあまけり

御殿の軒端に草の生へるさまに實に目もあてられずこ
の有様を見るに付けては昔し王朝の盛なりし時の事が去
たはれて思ひにあまるはどなりと王家の衰微を歎れたる
なり
宮闈中殿頭承泰離々而生歎問前朝事冷露滴我衣一使至尋

なる道因乃ち先ず清輔の家を訪ひ
流涕して之を恨む清輔百方之と慰
諭すれども聞かず大に因却せしこ
とありしと其の歌道に熱心なりし
こと知るべし藤原俊成が千載集を
撰せしは能因が死後の事なりしが
其の歌道に深く心を注ぎしことよ
感じ能因の歌十八首を集中に載せ
しが能因の靈來りて涙を流して厚
く謝せしを夢み更らに二首を加へ
たりしと云ふ

皇太后宮大夫俊成 (八十三)

御堂關白道長四代の後大納言忠家の孫權中納言俊忠の第三子なり仁安二年正三位となり承
安二年皇太后宮大夫となり後剃髮して釋阿と号し元久元年十一月九十一歳にして卒す俊成初め藤原顯輔に養
はれ名を顯廣と曰ふ初め基俊を師として和歌を學ぶ時に基俊と俊頼と何れも歌名一世に高く互に流義を立弟
子も亦相反目す俊成獨り其間ふ處して俊頼に於ては其の歌の風格を賞美し基俊に於ては其の學の學力を稱し
二人の間に軒輊を加へず時人其の公平にして偏頗なきに感せしと云ふ俊成が自己の信ずる絶好の作ありとて

ば則ち曰く憲康昨夜願に死せりと義朝之を聞き茫然として人世の無常なるを歎き過世の念愈々決す屢々情を陳して官を辭せしも上皇其才を惜みて許し玉はす一日義清外に遊びて家に歸る最愛の女年僅かに四歳なる者門外に遊戯す父の歸りしを見て悦びて之を迎へ其の袖に纏ふ義清自ら以爲らく我が出離を妨ぐる者は之に遇ぐるはなし我が恩愛を割くは當に之を以て初めとすべしと忽ち愛女を贈倒し後をも顧みず飄然として去り賊に赴き剃髪して僧となり圓位と号し後西行と更む剃髪せし時年廿三歳なりし後義清の妻も亦尼となり高野に住して一生を送れりと云ふ西行常に曰く桑門之家なし宜しく行脚して身を終るべしと是より諸國を遊歴し足跡海内に遍く佳勝絶景の意に適するあれば杖を駐めて歌を吟じ以て樂みとを嘗て伊勢の二見浦に遊び大に其の風景を愛し假りに草庵を結び草を藉きて褥となし石に穴して硯となし吟泳自ら適す幾何もなくして又飄然として去る嘗て遠江を行かんとして途に天中河を渡り當師の爲めに痛く其の頭を毆たれ流血淋漓たり從僧大に恐り當師を懲らさんとす西行夷然として恐らず却て從僧を叱して曰く剃髮染衣の身凌辱に逢ふも苦しとせず汝は我が徒に非ざるなりと遂に其の僧を捨て去る高雄寺の僧文覺夙に西行の名を聞き相逢はい必ず之を凌辱し其の心略を試みんと欲す後西行飄然として高雄寺に到り一宿を求む文覺之に面し其の風采超凡にして威度犯すべからざる所あるを見て厚く之を遇せしと云ふ西行又嘗て源賴朝の請に應じて弓馬の道を語る去るに臨みて銀猫を贈る西行之を門外に戯むれ居りし小兒に與へて去る其の胸中の洒然たること概ね此の如し俗に江口の遊君の事を傳ふれども其の眞偽判じ難し西行後には東山の双林寺に庵を結び花を植へ樹を繞らし歌を作りて曰く

ねがはくは花のもとて我死なんそのささらぎのもち月のころ

と果して其言の如く建久九年二月十六日七十三歳にして死す西行の歌世々傳はる者多し今其の尤も人口に膾炙するもの一二を記す

よしの山やがて出しかもふ身を花ちりなむと人や待つらん

心かき身もあはれと知られけり瀧立澤の秋の夕暮

寂 蓮 法師 (八十七)

藤原俊成の弟俊海阿闍梨の子なり俗名を定長といふ幼時叔父俊成に養はる定家生れたるを以て自ら退きて僧となりしなり時に法橋顯昭も亦和歌を善くし寂蓮と其の名を爭ふ顯昭曰く和歌に至て易きものなり寂蓮の無學なるも尙ほ之を能くそと寂蓮曰く和歌は眞に至難なるものなり顯昭の博學なるも尙ほ之を善くする能はずと定家の明月記に寂蓮の死を悼みし條あり定家も深く寂蓮を重んぜしを以て見れば寂蓮も亦決して尋常の歌人に非るなり

皇 嘉 門 院 別 當 (八十八)

具平親王の裔太后大皇宮亮俊隆の女なり崇徳帝の後皇嘉門院に仕へし故此の名あり

式 子 内 親 王 (八十九)

後白河帝の皇女母は從三位成子なり和歌を善くし玉ひ加茂の齋院となりて三宮に准せらる嘉應元年病よりて職を辭し後薨髪して法如と号し玉ふ

殷 富 門 院 大 輔 (九十)

後白河院の判官代行憲の孫にまて從五位下信成の女なり後白河院の皇女殷富門院亮子に仕へて大輔となる

後京極攝政前太政大臣 (九十一)

後京極攝政前太政大臣とは藤原良經公のことなり權中納言より正二位に叙せられ建元元年權大納言に轉じ病

ふよりて職を辞し後又起ちて内大臣となり正治元年左大臣に轉じ建仁二年終に太政大臣攝政とされり忠道の孫兼實の子なり貞經和歌並書を善くす其の家集を月清集と云ふ平生我が作る名を記さずして秋篠月清と書せしを以てなり建元元年刺客の爲めに暴に斃す或曰ふ菅原爲長の所爲なりと異説紛々として眞を考へ難し

二條院讚岐 (九十二)

讚岐は二條院に仕へし官女にして源三位頼政の女なり定家卿曰く讚岐の歌は有家雅經家隆にも劣らず其の歌道の達人なりしこと推知すべし沖の石の歌を詠みてより或は沖の石の讚岐ともいふ女流にて十三經に通ぜしは此の人を始めとすと云ふ

鎌倉右大臣 (九十三)

源頼朝の第二子なり幼名を八幡といふ建仁三年九月從五位上に叙し征夷大將軍に補せられ建曆三年二月正三位となり建保四年六月權中納言に進み同六年十月内大臣となり同年十二月右大臣左大臣とかり同七年正月薨す年二十八歳なり兄頼家に次ぎて征夷大將軍となる時に年十二歳なり外祖北條時政及び母政子共に政權を掌握す既にして官位日に昇進を實朝尙ほ之を足れりとせず尙ほ右大臣たらんことを望む大江廣元其の尺寸の功を以て官位の累進するは長久の策に非ることを切諫せしも聞かず承久元年正月遂に右大臣となり拜賀の禮を鶴が岡に行ふ廣元白日を以て其の式を行はんとす勸ひ文章博士源仲章堅く舊儀を執りて聞かず即ち夜陰を以て之を行ふことに決す將に館を出でんとする時廣元又曰く臣若き時より未だ嘗て涙を落せしことなし今將軍を見て故なく涙の催すを覺ゆ安んぞ不祥の事なきに非るを知らんや故右大將軍東大寺を落する時甲を衷して不虞に備ふ今日の儀にも亦宜しく警戒する所あるべしと仲章又之を斥く廣元止むを得ずして退く既にして實朝鶴岡の岡に著す義時劍を擲けて扈從す候ふ病ありと稱し仲章に譲りて中門の外に退く時一人あり白裝

參議雅經 (九十四)

源朝臣中より躍り出で劍を揮ひて實朝の首を斬る仲章も亦數さる上下大に驚擾し切に其の刺客と求めしが頼朝の子公曉の所爲なることを知りたり後世史家以て義時の意に出るとなす實朝時に年二十六なり實朝天性武勇に乏しと雖も仲章及び定家を師として文學和歌を學び其の和歌の氣骨あることは其の人となりの優柔なりしに似ず著す所の金槐和歌集三卷あり

前大僧正慈圓 (九十五)

法性寺入道前關白太政大臣忠通の子なり延曆寺の座主覺快法親王の弟子となり初の名を道快といふ後慈圓と改む慈鏡とは其の諡号なり少時和歌を西行法師に問ふ西行曰く密教を學ばんと欲せば宜く先づ和歌を學ぶべし和歌を知らざれば密教は奥旨を悟り難しと慈圓大に感ずる所ありしと云ふ後鳥羽帝慈圓の歌を評して曰く其の風格と西行に肖たりと慈圓身門閥に生れながら夙に法衣を着けて佛教に歸し終に天臺の座主となり堀河帝の嘉祿元年九月七十五歳にして死す著す所の愚管抄世に傳くる

入道前大政太臣 (九十六)

西園寺家の祖公經の事なり内大臣宗實の次男なり嘉祿年中北山に西園寺を建てしにより西園寺殿と稱し終に

家号となれり承元年中左近衛中將藏人頭となり夫より累進して貞應元年八月終に太政大臣となる寛喜三年病によりて髪を削り法名を覺空と曰ふ年七十四にて薨せり源賴朝と姻戚なりしを以て威權朝野に赫灼たりといふ

權中納言定家 (九十七)

本書の撰者なり自己の作をも其の中に加ふるは和漢の書に其例少しとせず其の小傳は卷首に掲げたるを以て茲に之を省略す

從二位家隆 (九十八)

壬生中納言光隆の第二子なり初め寂蓮法師の嫡たり俊成を師として歌を學ぶ俊成も亦大なる望を屬せり後果して和歌の奥義に達し定家と名を齊しくし家隆は定家を推し定家の家隆を推し交々相推重す後鳥羽帝が師を求め玉ふや定家と家隆を進めて以て當世の人麻呂なりと稱せり家隆一生の間に詠せし所の歌凡そ六万首今に傳くる者其の十一にも及ばず家隆を玉吟集と云ひ或は壬二集とも云ふ家隆老後病に犯るされ剃髪して佛性と号し攝津の天王寺に居り年八十歳にして終ふ後世碑を其の地に設く碑文は大僧正道恕の撰びし者なり

後鳥羽院 (九十九)

諱と尊成高倉帝の第四子御母は七條院なり建久九年正月位を皇太子爲仁に譲り玉ひ後隱岐國に遷幸ありて顯徳院と申し帝は特に英明に君にましまして深く武人の專横にして王家の衰へたるを歎じ玉ひ讓位の後は北面の武士を置き又鍛工を宮中に召して刀劍を作らしめ玉ふな必屬精銳意して關東討滅の御志ありしが事成らずして却て北條義時の爲めに隱岐の國に流され延應元年聖所にて崩じ玉ふ壽六十三其の宮殿垣壁にして儼然と雖も其の形を認めしこととにこと帝尤も形骸と略し玉ひ定家と隆とを言帝の形體を受けしと云ふ

順徳院 (百)

諱は守成後鳥羽帝の御子なり承元四年讓を受け玉ひ承久の變に義時の爲めに佐渡に流され玉ひ仁治三年九月佐渡に崩す壽四十六帝性溫和純孝にして物と忤らはず常に和歌を嗜み玉ひしと云ふ

新撰諸禮式

第一 禮式之必要

古き書にも相彼風一有
皮人而無禮何不
過死とありて人間に
は是非禮式の必用なる
ものなり禮式あれをこ
そ上下の外貴賤尊卑の
別もたちて國家の秩序
も亂れず交際も圓滑に
なるべけれされど禮の
用は和を貴しとすとの
聖訓もありてあながち
儀式にこりかたまるも
よろしからずせしてや
國の有様も日に遷り變
りゆく明治の今日には
又夫れ相應の禮式ある

歌人の心得

第一 和歌を學ぶことの必用

和歌に短歌長歌の別はあれど我が國詞をもて能く我が心を言ひあらし辭簡にして意深きことと彼の漢詩や泰西の詩に比ぶべくもあらず其の巧なるに至りては能く人心を和らげ鬼神を感ぜしむるも足るべく真に我國文學上の花どころ曰ふべけれ而るに世の學生たち此の結構ある和歌の道を捨て却て信屈なる漢詩に心を寄するもの多きはまことに訝るしき事にぞある何れの國にか我國固有の文學を捨てて却て外の國の文學を教ふる所やあるべき我國の歌に通じたる上は其の人の才智次第にて万國の學問に心を注ぐもさることながら自國の歌は少しも之を知らず一足飛びに外國の詩歌を學ぶは實に其の本末を知らぬかこのしれ者なり世の文學に従事する者と必ず和歌の道に心を寄すべきみにこそ

第二 和歌を學ぶの順序

和歌は性情を言ひ現はすものなれば自然に出るものとこいへ決して學ばずして能くし得べきに非ずてにをと係り結び其の他詞の活き方語の雅俗等其の道を究め其の名人とならんとするには中々容易の事

るべからず衣服裝飾并に住居の有様且は交際の模様など大に昔日と其の趣を異えざるを以てあながち古の禮式を墨守せよと曰ふは固より不可なれど如何に簡略を尙ふ世の中とは言へ近年交際社會に無禮無作法の事多きは歎くに餘りあることなり我國の古より禮義國君子國など自負しつゝありしが今の有様で進み行かばあたらず神州は禮儀なきの國となるべしわきて近年世の女流卿が學問ある者は活版が

に非ずされど初學の者は宜しく多く讀み多く作るべし多く讀みどは古人の歌を多く朗讀して之を心に記憶せざるなりし時は其の調子自然と口に出たりて之をばなごの工合も自然と心に會得するに至りぬべし固より其師を擇びて學ぶことと必用なれど暇あれば古人の名歌を書齋の襖屏風などに貼り付けおきて朝夕之を口に上げすことは大なる利益とあるものなり又多く作れどいふは他にあらす誰しも初めより名歌の作り得ぬものなれを景に逢ひ事に觸れ其の格調の如何を問はず思ふまゝ詠み出づべし古の名人ですら一日百首といひて多くの歌をよみしは皆其の熟練せんことを求むるなり先づ大体三百首を作りなば漸く歌の味が分るものなりさて其れより後之師に就きて添削批評を乞ひ又自ら古歌を玩味して新案を考へ出すなど其の人の才學のまゝなるべし

第三 和歌は鍛錬を要する事

前の條に多く和歌を作るを以て歌を學ぶの楷梯なりといひしが其の道稍々開け其の歌も聊か進歩の域に達せば之を鍛錬するのみも亦必用あることなりこの和歌の事ならねど昔し一人の俳人ありて

米洗ふ前に釜の二つ三つ

といへる句を得ていみじくもよみしと誇りがはに之を其の宗匠に示

善いとか何とかいひて其歩きざま其の物言ひざま和洋とも漢とも付かぬ誠に見苦しき立振舞あるは實に見苦しき限りにあらずや是れ此の書に附するに新撰

諸禮式の大要を以てする所以なり其の禮式は

古禮と折中して今の時世に適するやうになしたるものと知るべし

第二 禮は主と

すること

禮式の數千差万別なれども禮の要は唯敬の一字に在り敬の一字をさへ忘れずは禮の事に於

せしに宗匠は此のはたは死せしむるなり俳句には活きたる盛とてよむべけれどと少しも譽めざりければ其の男不満に思ひながら家に歸りて如何程考ふるも其の死せしといふことの合点行かざりければ再び之を宗匠に尋ねしに宗匠之筆をとりて米洗ふ前に釜の二つ三つと更めたりしと唯に之を更めたるのみなれど死活之によりて別るかくの如く一字の違ひにて死活盛鈍の差あるものなれば和歌を作るには尤もてに之を注意すべきことなり

第四 歌の懷紙并に短冊

我朝にて歌の懷紙なる者と清和帝の御代より始まりしといふ短冊といふ名は始めて日本紀に見ゆされど今の様と同じきや定かならず後宇多帝の御製をいせ玉ひし短冊まれに世に傳はるを見れば此の頃よりして今の如く廣まりたるものならんか尋其親王の御子の御息所の家の會に歌を短冊にかかしこと又の足利尊氏が褒貶の短冊を見しことなど太平記に見ゆたれば此頃は既に世にもてはやせしものと見ゆ其のかきざまには各々定まりありて歌よむ者の知らでぬあるまじきことなれ左に物しつ

第五 歌會の兼題

兼題とは宿題のことなり凡そ和歌の會を催さんとする者は兼て題を

てと思ひ半ばに過ぎん
たどひ進退禮に協ひ動
作節に中りたりとて敬
意なくば是れ眞の虚禮
といふものにて却て不
禮なるものなり例へ
ば下等の俳優の演劇の
如く身は忠臣孝子に扮
するも胸に忠臣孝子た
るの心なき故恰も木偶
を見るとき一般なるが如
しさればすべての禮式
敬を以て本とするとき
之其の細節に於て欠く
所あるも不禮たるを
免るゝに足らんか
第三 坐禮に眞行草
ある事

作者二分ち選すなり其の書法五首十首廿首までは短冊一枚に二行又は三行にも認むるなり廿首より多きは短冊に及ばざるなり短冊は三つに折りて二折の内に題を書き一折に左右に分けて會日と亭主の名を書くなり其の書式左の如し

一、一首題書式

東三日月
基定亭

一首題之折
目へかけて
書くべし

二、二首題書式

松月佳色
亭楊松
東十六日
仍之亭

二首題は二行に書くべし頭のならふを嫌ふ又一折に一題つゝ、書きたるもあり左の如し

河上樹

東五日
思助亭

三、三首題書式

東十月
出定

右の如く書きて三折し短冊に添へて杉原紙にて上包をなして出すべし短冊の上包に何懷舊何月某日取重など書くは無稽の至りなり元來上包を白紙にして出すは作者名を書かしむるためなり例へば左の如し



上包に題書あらは左圖の如く下の折に作者の名を書するなり但し略式なり

古禮を案するに高貴附
筆下筆への禮と眞行草
の三に分てり眞の禮と
は左右手掌を組み合せ
鼻の手につくはどに頭
を下ぐるをいひ貴人に
對する禮とす行の禮と
は兩手をすり合はすは
どに一所によせ眞の禮
よりとや高く頭を下
ぐるをいひ同輩に對そ
る禮とす草の禮とは兩
手をつく間を四寸ほど
になし頭を繞に下ぐる
を云ひ下輩に對するの
禮とす今日にてもかく
ありて然るべきなり總
じて頭を下ぐるに頭ば

かり下げて肩を下げざ
れば首筋あきて見ゆる
し肩脊と共に頭を下く
べし勿論腰の高さもよ
ろしからず腰肩頭等し
く下ぐる心得あるべし
取次人ありて貴人に
面會する禮

取次人の後の方三尺は
うり筋違ひて進み行く
べし取次人禪をさせん
と思ふ時禪者の方を顧
みるものなり其の時下
座して禪をなすべし
其の禪の仕方は初めに
左の手をつき右の手を
膝の上に置き右の膝を
膝へ引きながら海狗の

此の外鳥の子又杉原にても短冊三折の寸法にたちて短冊に添へて題を書くもあり左の如し
因ふ云ふ父祖父などの名を肩書にするは大に不敬なり必ず左式の如くあるべし

私題
寄松祝
父家主事
何月曾堅重
宗近勸進

第六
詠よみ草くさう書しよ體たい

歌草は二行七字を書くべし或云ふ折歌草に二枚重ねにをべし一枚の歌集に用ひ一枚は宗匠よ奉り點を請ふ宗匠合点して後懷紙又は短冊に書くべしと

詠歌草 杉原一枚を二つに折り又五つに折りて用ふべし左圖の如し

のほつともなうはやう左
の手にてかいこみさて
左の膝を引^ひき合^あはせて両^{りやう}
手をつき禮をあすべし
せんす
扇字の事

扇字の事

現今にてて扇を持つて
大にすたれたれど古
の四季共扇を携ふる
を禮式となせり今日に
ても之を携る者は其の
心得なかるべからず座
敷に在りては必ず扇を
ぬき右の膝脇に置き歸
る時にさして歸るかり
ながら事はなしぬくべ
からず父貴人の前にて
扇をつかふは大に無禮

土司土司重
冬新善

平家書

竹不改色

尊鎮

ナリメ

養休んをむかふあひ出 法衣
 大云人や代りて法衣
 形衣もねりてきりて衣衣の
 ふひろあひけりて世世なり

普通の豎詠草と左圖の如く二行に書く

題

名

折詠草

杉原を重ねて折るべし左圖第一の如し題多きときは左圖第二の如く何首も書きつくすべし

通判

庭栗草

枯き人めむか
まはさすそめ
あなを多と
七字

我宿のなむれ
すもあや
いふひも
七字

第一

第二

題

名

題

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

第七 懷紙書體

懷紙に一首懷紙二首三首五首七首十首十五首二十首三十首五十首百首等の書式あり其の寸法長短と一ならずと雖も多くは大高懷紙長

なりされ盛装の時又は時宜により之をつうふならば三間ひらき左の手をつさうつふきて我が鼻のあたりにてそよ／＼とあふぐまでの事あり
貴人に書狀を奉る事左の手に持ち右の掌も居て参らすべし下輩の書狀あらば其の名の所を持つべし上中の品封狀などの別あれども概ね此の如し
扇小刀を参らす事扇は要のものを持ちて奉るべし小刀は柄の端をもち刃を我が方にむけたてし揮くべしとかく我手より上の方を貴人のとらせ給ふやうに差出すなり扇の地紙小刀の刃を持つべからず

硯料紙を奉る事

紙を硯箱の下に重ね持ち出で貴人の前まで下に置き硯と紙とを左右の手に引きわけ硯を我左の方に置き蓋を取りて傍に置き水をおとし墨をすり筆を少しまめして硯箱のふちまかけ箱を向ふへまわし貴人の前におしやり紙は蓋の中へろくに並べて差

春日園詠女省春

和歌

九丘衛督源義氏

う架とくしむて四方

能成るアリを我

耳守架

一題の右又は三寸五分許の餘白を存すべし

一題の歌の文字より半字下げに認むべし

一題ねよび姓名と濃く墨をつけて書くべし

一歌の上は一寸一二分の餘白をわけて書くべし

一終りに一寸五分ほどの餘白を存すべし

懷紙の重ね方は其の人の位階によつて次第す同位の者なれば先進を上に置くなり女流と僧侶とは別になすを古來よりの方式とす

し出すべし

懐紙短冊を貴人に見

する心得

字頭を我方にして差出

すべし短冊も同じ事な

ら扇にすへて出すもよ

し物じて人の詩歌を見

るには同輩たりとも先

づ戴きて後披らさ見る

べし

花進上の事

草色は華を下ふなし木

の花は華を上になして

参らるべし尤も花の本

を紙に包みたる所を持

つべし参らせやうは扇

小刀に催すべし

掛物とかくる事

總て懐紙は下をそろへて重ねべく之を綴るには檀紙を幅一寸七分に
たち四つにたいみたるものを用ふ其の圖式左の如し

詠寄遠祝

和歌

伊賀守幸室

あれのいづれも
困よりほろりて
残まけし地へ
もみり

三寸四分

年月日 何亭

講師何
續師何

冬月詠三首和歌

正三位藤原資成

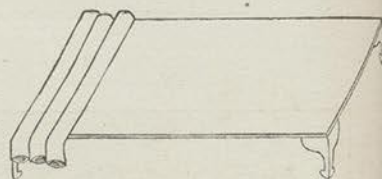
冬色

冬うれのさうりさひさ
あふ後そ地とれのとる
いろもほゆる

冬雨

ねたかくそとくそ
あさやねとくそ
夕暮るのあふ

二首懐紙書體



懐紙を文臺へ置くには上の如く懐紙の頭を、
りて文臺のは
しにうけかく
べし下筆はど
文臺の左へか
くべし
不参者の懐紙
は巻きて文臺
の下に置くべ
し

其の書き方一首の懐紙とかな

じ但し初めに詠二首の文字を

加ふすべて一首を二行と七字

に書き盡すべし其の書式左の

如し

茶を勧むる事

古禮には臺天目にて捧

るなり今もなほ之を用

ふまかる時は臺どもに

取りて臺を下に置き茶碗ばかりを取あげてのむべし其の時通ひの者此の禮を知らねと臺をはなさぬ事あり強て取るに及ばず時宜によるべし

手水を參らす事

手水は少しもかけざるべからず手拭は扇にすへてまいらすべし

楊枝を參らす事

扇にのせて參らすべし楊枝のささを貴人の左へなし其のまゝに取て使へるやうに敷すべし
途中の禮
貴人の我が右の方を通

詠五百才子歌

秋歌

於中納言實際

そひ衣かけくもさぬ
たふくらの首のまひ
つゝとぬぬらき

懷書

わくわくあられと
ふふぬぬたふぬぬ
そふのふらな

秋月詠三百俳歌

權中納言藤原實際

若葉

丁月と云れぬらさや
いそぐとくさぬらさや
わくわくあらき

秋歌

ふふとくさぬらさや
さふとくさぬらさや
たふとくさぬらさや

懷紙

ゆきとくさぬらさや
ふふとくさぬらさや
さふとくさぬらさや

し同席の我が左りを通すやうにすべし無輪帽子を脱し腰を折り貴人の行き過ぐる迄立ち止まるべし同輩ならば立ち留まるに及ばず
人前にて書物を見る事
口を二三枚さらりと見中程を二三枚見終りを又一二枚見てさしれくべし
屏風たてやうの事
墨繪を上とし彩色を下とす一双ならば繪の書き出しを上終りを下に立つべしすべては書を上とし書を下とす又古

筆^{ひつ}は上新筆^{しんひつ}の下^{した}とす立^た
るときはさん中^{ちゆう}を二つ
に折^をりて立^たて左右^{さうぶ}へひ
らくべし

着座の心得

座に付くには一座を見
あはせあいさつして我が
座すべき所よりは少し
下りて座すべし又座を
立ちて本の座へ歸ると
きは我下座にある人に
あいさつして座すべし
慇懃を忘るべからずさ
ればとて座すべき所へ
請ぜらるゝを頻りに辞
退して直らざることを却
て不禮なり之れが爲め
に主人が折角苦心せし

五首懷紙より以上は二枚繰きになし其の書き方と二行七字なり

詠三首并序

栢中納言實院

花下送日
花をみくきりけり
あふさのしほあふさの
なまなまきりけり
花をみくきりけり
あふさのしほあふさの
なまなまきりけり
花をみくきりけり
あふさのしほあふさの
なまなまきりけり

詠五首和歌

正二佐資校

柳

依てひめをとりて
そのやうな形のもの
をとりて

橘

高橋を新水の一本に
庭はうくもふたつそれの
やあ架まらぬあ

按衣道

得べし
目づゝひ歩行ふりの
事
あまりのけぞりたるは
あまの腰のゝみたる
横柄なり腰のゝみたる
柄なり
るは見苦しを掲げて
ばつゝと歩むべから
ず又すり足をするとき
能狂言の橋がりの出
端の如きもよろしから
ず何となく静かにあら
うとつまづかぬやう
腰を付て歩むべし目づ
かひと賤しかたぬやう
に心かくべし彼方此方
を見まわし隅々をのぞ

さしり目つりひの類皆
賤し手は常に兩膝にお
くべし用なき手を動か
すべのらず指をならす
と無禮の第一なり凍へ
たる時は少し袂の中に
引入も苦しからずされ
ども懷に入るべから
ず袖口のあたりにて温
むべし

座にある物踏み越ゆ
べのらざる事

何によらず少しの物に
てもふみ越へること大
なる不禮なり通るべき
道に物あらば跪きて傍
へ直し通るべし草履下
駄は足に着くるものな

さしり目つりひの類皆
くべし用なき手を動か
すべのらず指をならす
と無禮の第一なり凍へ
たる時は少し袂の中に
引入も苦しからずされ
ども懷に入るべから
ず袖口のあたりにて温
むべし

慶安

年々舞のむくもゆるり
あつりこころにゆるり
固きもの

れど人のものを踏みつ
けるは亦無禮なり

言語の事

高からず低のらず口早
になく口重かななくか
く譯の聞へてさわがし
あらぬやうに言ふべし
賤しき言葉をつとめて
之を避くべし人の嘶し
半ばに我も嘶しを仕出
すこと大なる無禮なり
つらくとも人の話をば
どくと終りまで聞くべ
きなり

貴人と同座する時の

心得

何事にも氣を付け掛け
たる物のゆがみたるは

扶圓詠七首後歌

衣冠權將藤原書

七夕月

移月夜かなき月夜も
り今あきらめつらねう
そりあきらめ

七夕河

そりあきらめつらねう
あきらめつらねう
又そりあきらめ

七夕系

そりあきらめつらねう
あきらめつらねう
又そりあきらめ

直し塵あらば取て捨て
風強く吹のば障子を立
なすするは勿論又何う
貴人へ用事ありて話す
べき人來らば早速次の
間へ立つべし貴人書狀
を覽又は書き給ふとき
は目のとやかね程に退
くべし貴人老人などの
年を問ふべからず客の
前にて犬猫など叱りた
いくべからず
貴人の前にて鼻をか
む事
次の間へたちてのひべ
し立れざる首尾ならば
下座へ向ひ少し低くか
みて鼻を拭ひかくべし

十首以上十五首二十首三十首五十首百首は皆一首の歌を二行にまた

そりたしん
七夕
人ようさつて終るい
七夕のすれ又あふ
座るんやて書
セ夕衣
智つはまのそりも
り金のつぎあふか
てのそりも
セ夕別
一と夕のつるふとそり
そりそりやそりそり
あつたつた
セ夕衣
そりそりそりそり
久々のそりそり
そりそり

女の懷紙はかさをを用ひ若は圖の如く重ねの方に書くあり文字

契

あそび
やう月人

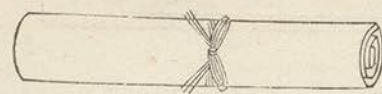
やう月人

はなふくしの

はなふくしの

はなふくしの

ちらし方はいろくあり行の
かしらならばねやうにすべし
上の如くまたいめたる懷紙
は巻て上巻をなし其の上を
紅白の水引にて結ふべし次
圖の如し



すべて鼻をかむ事は朝
めに少し低く短くかみ
次に少し高く次に又初
の如く短く三切にかむ
べし平生かくかみなら
ふべし又あくびのびな
さは大の不禮なればか
たく慎むべし
立花見やうの事
先づこなたな扇をぬき
かき床前に横疊一疊置
き両手をつきまづま
ささきへ目をつけ次第
にしんの左の枝に目を
付けさて左のうけ枝に
目をつけ露もち露こば
しを見て水さきを見る
なり而る後退きて水さ

女の二首并に三首の懷紙書き方左の如し

わをはめしんをはめ左
右のうけ枝をはめ其後
何にても見所をはむる
かり

障子襖出入の事

何處にても下座の方を
開きて出入すべし立な
がら出入すべからず左
の手をつき右の手にて
あけすりこみて迹をた
つべし

臺に魚積やうの事

臺を横にして魚一つな
らば頭を我が左りへな
して海の魚は腹をむか
ふにぞし川魚は脊をむ
かふになすべし
臺に鳥つかやうの事

鳥一つならば我が左り
の方を頭にして鳥をあ
ふのけて横につむべし
鳥の頭の左の羽がひの
内へかしよげ羽を少し
ひろげべし鶴雲雀小鳥
などは頭をせげすのべ
て積むなり

焼香の事

位牌の三尺ばかり前に
て懷中より香包を出し
左に持ち右にて香をつ
まみ香包は左りの袂に
入れ卓高きときハ半腰
になり低きときはつく
げひて香をたき三足あ
どへしさり敬ひ拜すべ
し香包は奉書三つ折り

鯛子

松風

さうりし

ひまの

枝の板

うへ

あらと

ひこ

あや

うへ

うへ

初子

うへ

うへ

うへ

うへ

うへ

うへ

うへ

うへ

うへ

にして跡先を打ちかへすべし

通ひの心得

通ひに参る人の腰を居

へ腹をかりて膝頭のか

いまぬやうに身を固め

脇をはるがよしされば

とてあまり張り過ぎた

るはよろしからず臂へ

ば脇の下に鶏卵一つは

さみてひしげもせず落

ちもせぬ心のごときを

よしとす扱て踵を疊に

つけ廻からず早からず

つまづかぬやうに歩む

べし

膳の持ち方の事

左の手にて膳の中程よ

重ねの色に付きては諸説あれども通常多く行はるゝは左の如し

紅蕚 表紅

紫蕚 紫

紅梅 白

櫻 白

つゝし 青

卯花 青

紅葉 赤

白菊 白

うつろひ 菊 紫

此の外に樟 檉 藤 重 葡萄 菖蒲 等々あり

冬

第八 短冊書體

當座探題の歌を書くはあながち又式を要せず又短冊に我名を書く

に異跡の草字を用ひることよろしからず實名を見やすきやうに書

くべし短冊の寸法と廣さ一寸八分長さ一尺一寸五分を通常とす後字

多帝の製短冊は左の如し

還山

一字題書法

蕨

春の山乃奥より夕暮の

上にある穴は綴目なり指一つは余白あるべし

上にある雲形を青雲といひ下にあるを紫雲といふ上下を誤る

べからず

名字は初めの行より半字下りとなるやうに書くべし

二字題三字題書法

春花

終日またりくしとて夕暮の

夕暮雨

好のきあけのきとて夕暮の

み立つべし客人の膝へ
膳のさわりたるもあし
又あまり遠さも悪し

飯のつぎやうの事

夏は飯器の蓋を取て出
そべし冬は持出て蓋を
取るべし左の手を仰向
て出す時客人飯碗を出
すをいとしこをしかと
執り右の手にて杓子を
取り飯の中を左右へ少
しわけ真中を二すくひ
つぎて其のまゝに差し
出すべし飯乞貴人たり
ども盆にてあゆる事な
しと云ふ

汁かへやうの事

汁と蓋ふたにてかゆるなり
のへたる汁には勝手しやうてに
て外の蓋ふたをして持ち出
て右の手にて蓋ふたを取り
盆でんの傍そばにかき両手にて
さし出すべし

酔人心得の事

先づ盃を持出でたらば
一座の貴人の方へよせ
てすへ扱て饒子を持参
し盃の側に竊き左りの
手に盃蓋をもち右の手
に饒子をもち三足ばかり
膝へまざりて竊くべ
し客人挨拶ありて盃を
はとむべき人定まらば
其人の側へ持参すべし
酌取べきやうと左膝

四字題五字題共に二行に書くべし但し熟字じゆくじをとなすべからず

老後述懷

ひさしと程のふか

禱

五月雨

五月雨

暗

春風 26

冰解

飯名題書法

海島錄

恋ひぬわすれぬおもひも
ほろろそとにぞとつとむ 霜

宮古丸

月夜

うづろろろやらの月とてゐるや
あゝねねふのそよぞよらん 改稿

詞書の多き時は左の如くちりして書くべし

光の海

三子首歌

よつと

おとけをうのさこそまわれさうそやね
心算いさくそをくうちう舞一 宝張

歌合の短冊は右をあげて書くべし是を判の詞をかく爲めなり

湖
月

千籠重墓埋

千載重宝
松あしはくをれあらんを月あ
はくをれあらんを月あ

女の短冊は名を裏に書くべし

代筆の短冊と表は作者の名を書き裏に筆者の名を書くなり

發句を短冊に書するには一行に書き下すべし

新樹

紅乃志深乃也亭亦立 務仁

詩^しを書^{しよ}するの例^{れい}は次の如し

初花

時至園林草木濃賞心賞如洛陽中
愛看雅帶加吟興連夜春風一朶紅長維

短冊の綴り方左の如し

年月日 何亭

綴るにこそ水引を用ゆ上より指一つはせめて綴るなり

第九 歌會略式

絲竹管絃酒池肉林の遊びは豪華なるも費多くして品行信用を害し身の衛生にもよろしからず士君子の樂しみにあらず其の優美高尚にして文學上の裨益ともなり其間に樂しみの多きは和歌の會にしくはものかし而るに世にはいろ／＼の無益有害の會は盛りに行はれて歌會などなす者の少なきは眞に遺憾なる事にこそ今こゝに歌會の式を載するも世の人達に此の優美なる清樂を紹介せんとの微意に外あらざるなりさて歌の會には古より種々の儀式あれどもこれは舊習井はるゝか

る上つぎまの御事にし下まの者には要なき事あればこゝに古例を考へ雖にても聞き得べき歌會の式を記すべし

一 歌會に預め事を執る人を定めかくべし其の名稱左の如し

一点者 また判者ともいふもろ人の目のよしあしを批評加點する

人にして集へる中にて歌學に長じたる先達の人をえらむ

べし

一 詠吟 宮中の御歌會かきにては講師といふ其の坐に集へる人の

兼題または即席の歌をよみあぐる人なり

一 助吟 宮中御歌會には之を講師と申すよし詠吟者を助くる役目

なり

一 行事 よろづまめやうとして能く故實な事蹟したる人に委ねべし何事にまれ其の會に付き始終の事はからふ人なり上

つぎまにて之を奉行と申すとかや

一 給仕 これは末座少年の人かき二三人事を執るべしまたは其の會亭の子供なきにても苦しからず

一 會日はかねて定め置き行事よりつぎふべき人々に題と共に案内し

かくなり

をつき右はひさを少し

たてゝ酒つゞ時に右の

膝もどもよつくべしい

くたびにても此の如し

飲食に付きて慎むべ

き箇條

一 箸なせり これは膳

を食こん焼物をや食は

んとぐつぐと見合す

かり見苦しきものなり

慎しむべし

一 移り箸 是を焼物を

食ひて直ぐに炭物へ移

るを云ふすべて菜は一

づい喰ふべし

一にぎり箸 箸に付

きたる飯粒をども箸に

てかどすを云ふ是れま

た慎むべし

一もぎぐひ これは箸

に付きたる飯粒を口に

て取るをいふ之も見苦

し

一 ねぶり箸 是も右に

同じく箸を深くねふる

をきらふなり

一 こみはし 口中へ箸

にて押し込むをいふ

一 こち箸 炭物汁の實

なごの下に在る物をこ

ち起して食ふをいふ

一 さぐり箸 また何ぞ

や有ると探るをいふ

一 さわし箸 香の物に

て湯茶の中をくるく

と廻すを云ふ

一ろろ箸 食とんとし
て箸をつけしが食はず
して箸を引くと云ふ
一うけ吸 汁の再進を
通ひより取りて膳も
置かず直に吸ふといふ
一またもり 飯を箸に
て椀の中へをしかため
て食ふと云ふ
一膳をし 膳の向ふに
在る物を取り上げもせ
ず箸にて直に食ふをい
ふ
一犬喰 うつむきてど
かくの挨拶もせず喰ひ
入れて居るをいふ
右の條々は飲食上大に
忌べき事なりといふ

一歌をよみたる人点者に見せ添削を乞ひかき其日會亭へたづまへ
行くべし其の書きざまは前に委しく述べたり
一會の席には床の上に神像をのけ机をすへて物どもそなへ其の前に
文臺を置くべし
一神像は柿本人麻呂山邊赤人貫之躬經など亭主の心のまゝなるべし
世に知らぬ人の像などくるはよろしからず但し追悼の會に其
の人の像をのくるあり
一月花の爲めに設けたる會にては神像をかけずして月花の方を上と
することもあり
一會日又は定まりたる時限より少しく早くゆきて次の間にまつべし
おこたりて遅く来るは甚しき不禮なりと心得べし
一坐席の順序と点者を初めとして年配徳望などによりて定むべしこ
は行事のむねにあり
一坐席定まらば行事たちて神影の掛物をかくべし初めよりかけてあ
らば簾帳などゝりて座中の人に會釋すべししる時はひとりの
靜と影前へ進みて懷紙を文臺に載せかきて禮拜をべし但し其の
順序は末座の人より始むべし
一應和と文臺より三尺ばかりこなたより膝行して進みより又膝行し

心かけてたしかむべし
其外焼物の串にさした
るは串を持ち箸にて
はさみ食ふべし

飲食の順序

食するははじめ先づ右の
手にて飯椀の蓋を取り
左の手へ移し膳の左の
方へ置き汁椀のふたを
取る事前に同じ扱箸を
とりあげ直ぐに持ち其
の手にて飯椀を取りあ
げ左りの手へうつし二
箸飯を喰ひ下に置き又
右の手にて汁椀をとり
あげ是も左りへうつし
汁を喰ひ右の手にとり
て下に置き又右のごと

て思ふねかづくべしされどあまりうきだつはよろしからず
一次に行事いので文臺をとりいれ讀むべき順序を定めてよき程の所
にすゑかくべし
一次に詠吟者助吟者いので助吟者は文臺の上の懷紙をとりて我が左
に置き一ひらづい文臺に載す吟詠者は之をよみあぐべし
一歌をよみあぐるにはゆるやかに聲をひきてかだやかなるべし貴人
点者あどの歌のかりかへしてよむべし詠吟者自身の歌は會釋して
聲ひさくよむなり
一事かはりて詠吟者助吟者もとの坐に就きて後行事饗應の事を催そ
べし
一饗應の事はあまり華美に流れざるを旨とすべし
一饗應終りて後に之即坐の歌をよむなり饗應の前にも苦しから
ず
一當座の上は行事題かきたる短冊をもりたる祝蓋をとりて巻頭軸よ
むべき人の前に持ち行くべしさてどの所へかくをかのくひと
りづい立ちてとり来るべし
一次は給仕碇箱を配りて後かのくたどろがみに題の字をしるしか
きて歌を案すべし

くは飯汁を喰ひ汁の實をくひ左の手にて下に置き扱膳に付きたる菜を喰ふべし等は貴人の前にては短くもつべし亭主のはとくによりだんくど上を持つちり飲中に盃めぐらば箸

一歌なりたる時とよき程を見て点者の前に持ち行くべし
一歌に点者の評を乞て後短冊にかき行事に見せて後神前に供をべし
一その後行事いで、祝蓋をとりいれ短冊の序をどいのへてもち出でかくを吟吟助吟者のよむこと懐紙に同じ
一次に行事祝蓋を神前にすいめ拜して退く其の次にわのくひとしく拜すべし
右にて其の歌を終るなり其の細目は時にのぞみて宜しきを制すべき事にこそ

を飯椀と汁椀との間に筋違に膳のふちへかけて置くべし食し終りて初めの如く横に置くべし又汁かへる間は飯を食ふべからず

盃 献 酬 の 事

總て盃を人に参らすには飲みはしてあとを少し残してふり流し扱左の手の掌にすへて右の手にて右まわしに少し廻しそといたいて臺にすへてさすべし

膳のすわりやうの事

膳にすはりやうは眞向に居らず少しすみかけて居るべし

車上にて人に逢ひたる時の禮

車上にて知人に出逢ひたる時とて体を整へ帽を脱して會釋すべし自分より目上の人なれば車を下て挨拶すべし椅子によりたる時人の來りたる時の禮

椅子によりたる時人の其の室に入り来るあらば直に椅子を離れて直立しはとよく禮式をかし其の人にも椅子を與へ其人着席したる後に自分も椅子に復すべし

貴人より物を受ける時の禮

長官又て長上の人より物を受ける立禮は先づ其の長上の人正面に進み横見することなく其の人に着目して進み大抵一間位の距離にて立留まり其人に着目し体の上部を稍前へ傾けて禮をなす其の両手は洋服なれば左右のツボンの縫目に小指のあたるやうに眞直に垂下すべしやがて二三歩進み寄り左の手を出して物を受け取り右の手を添へ其の體にて元の所へあとすさりをなし辞令書ければ之を披見し終りて之を卷き左の手まで持ち其の人に着眼して体の上部をのりむること前の如くにしてさて其場にて右に轉回して自分の席を復するなり陸軍禮式警察禮式又は各學校にての禮式いづれも此の如しすへて進み行くとき又却歩するときも足は左より運び初むへし進み行く時に其の人に着眼し行くこと必用なり足元を看ながら歩き又は横見をするは大に不敬なり又はかはだ見苦しきものなり

途上にて人と連行する時の心得

貴人老人我親の年配の人と連れ立つ時は其の人の左の方の後二尺位離れて隨行すべし併し夜間又は案内の知れざる時などは自身少しく前へすいみ案内の心掛あるへし同輩なれば肩をからへて歩むべし

途上にて皇族の通過を拜するべき心得

先驅の人々來たるを見れば道端程能き所に恭しく直立し先づ帽領巻手袋などを脱しかくへし勿論傘をさし又は眼鏡をかけ又は脛をあらこし腕をさくり居るなどは大不敬なりやがて御車の三四間前まで近づきたる時にて体の上部を屈して敬禮を施し四五間も過ぎたる後に本の姿を復すへし二階又は高き所より見おろすことは勿

論家の中の窓すたれの中より頻きみることも大不禮なり又御通過の際に妄りに高聲を殺せるなどは不敬の甚しきものなり宜しく並置謹嚴にして中心より敬意を表すべく又御通行の前を横ざる等のことあるへからず洋服を着け居る時必ず帽を脱せば之を左の脇にのひこひう又は右の手にて帽を持ち其の裏を内にして手を垂下して右の股にあててを禮式とす

結 論

以上列記せし所は我國禮式の大要にして其の他冠婚喪祭の事洋服の着方西洋料理の食ひ方又日夜會舞踏の諸作法等枚舉するに遑あらずと雖も紙數に限りあれば之を畧して他日に譲りぬ之を要するに禮義は大に人の品位を高めるものにて其の一舉一動は以て家庭教育の良否及び其の性質心掛けの善惡を表するものなれば交際場裏に立つ者は宜しく平素万事に注意して不禮の事なきやう心掛くべし其の才智學問人に勝ぐれたりて其の應對動作に無禮不敬の事ありて忽ちに其の腹の底を見らるゝ心地するなりされば世の子供を持ちたる親達ハ平生其の心掛けありて常々其の子供達に作法の大体を飲食起居來客應接の間に訓ゆべきことにこそ

諸 禮 式 終

明治廿六年十一月五日 印刷
同 年十一月十一日發行

著 作 者

三 田 村 熊 之 介

發 行 者

石 塚 猪 男 藏

印 刷 者

前 田 菊 松

發 賣 元

鹿 田 書 店

大阪市東區安土町四丁目百十五番邸
周 廣 合
大阪市東區木町壽壽町六十八番屋敷
大坂市心齋橋筋安土町南へ入



朝倉

1001975554

朝倉書
大阪市港區

